

JCAW

Japan Commerce Association of Washington, D.C., Inc.

ワシントンDC日本商工会会報
号外 ~ Vol.10 ~

会報別冊

ワシントンの映画好きによる「リレー連載 「ワシントンで気ままに映画 を語ろう」 Part 1

- 第1回 (枝田 淳)
- 第2回 (黒澤 ぽちこ)
- 第3回 (ちび〇子)
- 第4回 (チェブ子)
- 第5回 (かっぱ谷)
- 第6回 (ぽっちみみ)
- 第7回 (特別企画・共同執筆)
- 第8回 (田中 B作)
- 第9回 (うなぎの寝床)
- 第10回 (藤井 陳)
- 第11回 (オサチ)
- 第12回 (かっちゃん)

本稿は2011年7月号から2012年9月号までの会報に掲載されたものをまとめたもので、内容は掲載当時のものであることをご了承ください。

JCAW Copyright © 2013 All Rights Reserved.
会報内すべてのコンテンツの無断転用を禁じます。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第1回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

枝田 淳*

「さんから今晚どうですかとお誘いがあった。さんと
は、こちらに来てからひよんなことで知り合い、ちよくちよ
く居酒屋風の店で仕事とはあまり関係ない話題を肴に
盛り上がっている仲である。今回の場所はいつもと勝手
が違う“1789”(写真1)というジョージタウンにある上品
なレストラン。これは何かあると思っていたが案の定、商
工会議所の会誌にいつも盛り上がっている話題の一つ
である映画について何か書いてほしいとのこと。確かに
私は映画好きの一人であるが、世に映画好きは多く、ま
た、読んだこともないのに勝手に格調高いと思いついで
いた本誌に投稿するような文才もないなどの言い訳で、
なんとか円満にお断りしたいと考えた。しかし、NOと言
えない日本人の典型である私は、慣れないワインで酔った勢いもあって、簡単に受けてしまったの
が、事の始まり。



写真1: 今回の連載のスタートのキーワードとな
ったジョージタウンのレストラン、“1789”

「さんもかなりの映画好きである。その彼が私に映画に関する原稿を依頼した理由は、私が映画
俳優を目指して現在ワシントンにて修行中の身で、映画に関してより深い話を語れるため、とかい
う尤もなものであれば、読者の皆さんにも納得いただけると思うが、そうしたことは全くなく、映画の
面白い話が書けそうだからと極めて単純。確かに私は映画が好きで年間100本以上の映画を観る
が、その程度映画を観ている人は多い。難しそうな映画はなるべく避けて、どちらかと言うと映画通
を自称するような面々からは馬鹿にされそうなアクション映画を好む輩である。実は経歴書の趣味
の欄には映画鑑賞と書いているが、書道や俳句などと、かじった程度のもを大げさに書くのも、
また、下手なゴルフ、あたりまえの読書なども憚られるので、しかたなくそのように書いているにす
ぎない。かつては公認の映画通のレベルにまで高めようと、英検ならぬ映検(映画検定)にチャレン
ジすべく本は買ったが、映画の歴史や見たこともない映画の問題が余りにも多いため、早々と諦め
るような、根性のないただの映画好き。

「あえて他の映画好きとの違いと言え、私の父が映画会社に勤めていたことがあげられる。皆さ
んにはどうでもいい話かもしれないが、私の父のことを少し話そう。父は映画が大好きで、戦後まも
なく映画会社東宝に入社した。も切り(入場時の切符回収係)からフィルム運搬、チラシ作成等何で
もやって、持ち前の企画力や徹底した気配りなどで、あの400勝投手の金田正一氏と同じ高校出身
であったが、やめる頃には東宝名古屋支店のナンバー2にまでなった。若い頃は、映画監督になる
ことを夢見ていたといい、仕事の間に映画という映画はほとんど全て観て、また、作品の企画や脚
本なども勝手に書いていたようだ(こちらは日の目を見ず)。そうした訓練の一環か、ローカルラジオ
向けに連続小説の原稿も書いており(こちらはそれなりに成功!!)、その時のペンネームが“枝田
淳”、そう、私の現在のペンネームである。

*ペンネーム

しかし、結局、いつか映画監督になるという父の野望は、当時のモーレツサラリーマンの走りのようなライフスタイルの中で徐々に失われ、映画会社のやり手営業マンで終わることとなった。定年近くには名古屋地区にプロモーションで大物俳優が来る際には、ちよくちよく会食のお相手もしたようで、吉永小百合は永遠の Madonna だとか、○○は映画のイメージと違って下品だとか言っていた。今でも思い出すのは、映画の無料招待券を、しかも何処でどうゲットしたのか配給会社が異なる東映や松竹のものも含めて、山のように持っており、毎月お得意様や知り合いにせっせと送っていた。定年になってそうした無料招待券もないのに、金券ショップで買ってまで知り合いに送っていた。こうしたこともあってか、5年ほどの前の父の葬儀は、映画関係者や元お得意様などの多くの参列があり社葬なみの賑わいとなった。別に東宝だからという訳でもないだろうが、飲めばいつも、やっぱり映画は黒沢だとか、役者は三船が一番だとか言っていたし、いまわの床でも、あの“影武者(1980)”はやはり勝新太郎で作らせたかったと悔しがっているような、本当に映画の好きな父であった。

さて、前置きが超長くなったが、さんからの依頼に関して、いろいろ考えた結果、表題の連載を始めてはどうかと提案したい。先にも書いたように世に映画好きは多い。ワシントンにおられるそうした方々が好きな映画等について気軽に語るコーナーをこの会誌に作ってはどうかという提案である。なお、既に映画に関する記事があるが、それは映画の筋書きとその社会的な背景等の解説により構成された極めて格調の高い読み物であり、気軽な今回の企画とはバッティングしないと考える。

本企画で書いてもらう内容は、次の2部構成を考えている。第1部では自分の映画好きや思い出話など、自分と映画との関わりについて語ってもらう。本稿では上記の父の話などの部分がそれに当たる。そして、第2部では、指定されたキーワードをもとに映画や俳優等について好きなように書いてもらい、キーワードを変えてリレーしながら毎月連載して行くというものである。別にキーワードはなくてもよさそうなものであるが、以下の例を読めばわかるようにそれほど厳密なものでもないので、ゲーム性(?)を持たせるために設定することとする。この部分はせっかくワシントンに在るのだから、できればワシントンやアメリカの映画に関する話が望ましいが、固いことは言わない。それでは簡単にルールを説明しながら、第2部にあたる部分を書いてみることにする。出だしのキーワードは、この話のきっかけとなったレストラン名、“1789”としよう。

“1789”(【ルール1】これがリレーの始まりのキーワードであり、第2部はこれに関連する映画等の話で書き始めることが原則)という数字が、このジョージタウンにあるレストラン(【ルール2】アメリカやワシントンに実在する場所等の紹介があると良い)の店名になっている由来は、その年に開店したということではなく(営業開始は意外と最近で1960年)、地元のジョージタウン大学が設立された年とのことだが、その年には歴史的なイベントがあったがご存知か? 受験勉強で覚えた語呂合わせ年号暗記術を思い出していただければ、“火縄焼く(1789)、フランス革命”ということになるが、アメリカではワシントン(写真2)が初代



写真2: ワシントン大統領を記念したワシントン・モニュメント、リンカン・メモリアルからの撮影であるが、あれ何か変だ、前面のリフレクティング・プールに水がない!! (排水等設備改修中)

大統領に就任した年である(【ルール3】アメリカに関係する多少のためになる(?)情報を入れるとよい)。同じ大統領でも、最近公開されたロバートレッドフォード監督の“The Conspirator(2011)”や、スピルバーグがメガホンを取り制作中の作品など、リンカーンを題材とした映画には事欠かないが、ワシントンを経験した映画を私はあまり知らない。やはりワシントンと言えば、何と言ってもデイズル・ワシントンであろう。(【ルール4】このように多少なりとも関連があれば、強引に自分の好きな話題にワープしても何ら問題ない)彼の出演映画は数々あれども、私の好きな一つは、10年ほど前に観た“タイタンズを忘れない(2009)”である。人種差別、家族愛、友情、そしてスポコン(スポーツ根性もの)等引きつける要素が満載であり、それに彼の名演技が加われば面白いことは観なくてもわかる。更に、この映画が実話にもとづくもので、しかもお近くのバージニアの州立高校(写真3,4)でのお話ということになれば、一層この映画が好きになり、こちらに赴任後暇に任せて高校を尋ねたりもした。

D・ワシントンはこのところどうでもいい映画にちょっと出過ぎではないかと思う。少し前に地下鉄の指令員としての役を演じた“サブウェイ123(2009)”に続いて、またまた鉄道員として出演した“アンストッパブル(2011)”などは、鉄道分野で仕事をしており、また、前職場管内のローカル線で無人車両を逸走させて大騒ぎを経験した私にとっては大変興味深い映画ではあったが、別に彼が主演でなくてもいいのではないかと思う。その点、昔の彼は良かったなどと言うと年寄りじみで聞こえるが、“マルコムX(1992)”での彼の演技はすごかった。やっているうちにマルコムXになってしまったようで、まさにはまり役といったところではないか。

このように役になりきった俳優を私なりに選べば以下のとおり。随分昔の映画だがガンジー(1982)で本物に生き写しと言われたベン・キングズレー、ラスト・キング・オブ・スコットランド(1998)でアミン大統領を熱演したフォレスト・ウィテカー、エリザベス(1998)及びエリザベス・ゴールデンエイジ(2007)ですっかりエリザベス一世として定着したケイト・ブランシェット、そっくりさん勢揃い映画のクイーン(2006)で苦悩するエリザベス2世になりきったヘレン・ミレン、そしてキングス・スピーチでジョージ5世を演じきったコリン・ファース。ここまで書いて気がついたのであるが、私が英国での勤務経験があるためか、どれも英国関連の映画であり、またK・ブランシェット以外はアカデミー賞主演男優/女優賞を受賞している。話はマルコムXに戻り、映画の演説のシーンを観ていて、D・ワシントンの声や話し方はオバマ大統領のそれに似ていると思った。将来オバマ大統領の映画を製作する際には、是非彼にやってほしいものだ。

大統領まで話が戻ったので、再び1789年関連で話を進めると、アメリカではないがその年に起きたフランス革命については、革命自体や人物まで含めると関連する映画は多い。それらの中で、



写真3: 映画の舞台となったアレクサンドリアにあるバージニア州立高校(T.C. Williams High School)、今では立派な校舎になっている。



写真4: 高校のフットボールチーム、タイタンズのスタジアム、この地区ではかなり強い！！

ちょっと前になるが、ソフィア・ Coppola監督の“マリー・アントワネット(2006)”が話題となった。内容的にファッションとお菓子しか見るべき物がないとの酷評に私自身は当時観なかったのだが、観てきた娘によるとそれはそれでなかなか良かったとか。この原稿を書いている気になったので、DVDを借りて観てみたが、なるほどそのファッションはすばらしく、確かに、その年のアカデミー賞衣装デザイン賞を受賞している。このあたりで監督のS・Coppolaの映画制作スタンスについて論ずるのが映画通ぽくていいのであろうが、私の場合はあまり話の本筋とは関係ないが、マリー・アントワネットを演じたクリステン・ダントンが気に入っている。子役時代から注目されていたと聞かすが、それほど魅力的とも思えない彼女がなぜスパイダーマンシリーズのヒロインや本主役に抜擢されたかと、彼女を見るたびに不思議に思うのは私だけであろうか？と言いつつ、なんだか気になるのが彼女の魅力か？(【ルール5】以上のように、映画や俳優について、気軽に好きなように書くことを推奨。)

さて、冒頭のIさんとの“1789”での飲み会も、今回の企画の話や映画等の話題でいつものように遅くまで盛り上がり、やがてお開きに。あのレストランはジョージタウンのややはずれにあるので、少し歩いて映画“エキソシスト(1973)”でおなじみの長く急な階段、エキソシスト・ステップス(写真5)を降りてM通りまで出て、Iさんはタクシーで、私は歩いてキーブリッジを渡って家路に着いた。ということで、リレーのバトンとなる次回のキーワードは“キーブリッジ”(【ルール6】話の流れから次回のキーワードを定める)。

その他のルールとして、今回は本連載の企画主旨等も述べているのでかなり長いものとなってしまったが、【ルール7】分量は特に定めないものの、読むのに疲れない程度の量を目安とする、また、【ルール8】写真を数枚入れる、但し著作権等には十分注意のこと、【ルール9】執筆者名はペンネームでも本名でもよい、などを定めておくこととしたい。

さて、最後にどのように次の執筆者を決めるかという点については、当初公募も考えたが、時間的な制約等から現実的にはむつかしいため、“映画好き”の“友達の輪”でつなぐ事を基本としたい。ということで、次回はこの連載が始まるきっかけを作ってしまった、Iさんをお願いした。(【ルール10】最後に次回の執筆者を指定する。)



写真5: ワシントンの観光名所のひとつ? エキソシスト・ステップス、いまでも観光客が絶えない。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第2回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

黒澤 ぼちこ

さてさて原稿を依頼した本人が、その相手から又依頼を受けるとは何たる運命の悪戯だろうか。

“ミイラ取りがミイラになった”とはこのような事だと、砂漠の砂を空しく掴みながらじわじわとミイラにこちてゆく自分を情けなく、不甲斐なく且つ世の中の理不尽さを思う今日この頃である。

ところで前号で記事を寄稿された枝田淳氏によると、お父上が某有名映画会社にお勤めだった上、押しも押されぬ映画狂とかで死ぬまで黒澤の“影武者”の主演を勝新太郎にさせたかったと今わの際でも言っていたエピソードを紹介されていたが、このような人も実際に世の中に居るのだと驚きもし又感心もした次第である。

と人事のように言っているが、自分も何を隠そう今でも切実にそう思う一人である。

今でも世田谷区にある東宝砧撮影所で行われた“影武者”撮影発表会の様子を納めたビデオを密かに宝物のように押入れの奥で持っていて、鎧姿で現れた颯爽とした勝新の姿を学生の頃から数えて今まで何度見たことであろう(このような立派な鎧姿で現れた勝新は大映の“日蓮と蒙古大来襲”以来だったろうか)。

ご存知の通り、この映画の筋は武田信玄の遺言で3年間本人の死を隠す武田家家臣群の苦闘と影武者になり切る盗賊の丁々発止、双方の心の動きを巧みに描いたチャンバラ映画の最高峰である。威厳ある信玄と最下層の盗賊を同じ俳優が2役使い分ける所にこの映画の真骨頂があり、“この映画の成否は俳優で決まる”と子供ながらにこの映画への期待を自ずと膨らせたものである。



当時座頭市で一世風靡していた勝新太郎は役者馬鹿を地で行く、当に日本版ロバート・デニロ、最高の演技派俳優だった。しかし黒澤だけには猫のように従順だった三船(敏郎)とは違い、我侭放題の破天荒悪餓鬼がどのように緻密で細部に拘る黒澤組の独特の枠組みの中で演技ができるのか、成功すればアカデミー賞間違いないと誰もが想像した。

まあ～結果はこれも一方で世間が噂していたように大喧嘩の末“勝新”はあえなく降板、どちらかという上品で固い感じのする仲代達也に主演が交代し、無難な作品に纏まりカンヌ映画祭グランプリで終わってしまった(それでも凄いのだが・・・ファンにとっては超不満)。この解釈がもし正しければ、枝田氏のお父上の死んでも死に切れない、悔やんでも悔やみ切れない末期の一言の背景である。

他にも何故、凝りに凝りまくった脚本まで自ら書いた黒澤監督が20世紀フォックスの大作“トラ・トラ・トラ”の監督を途中降板(黒澤が既にカメラを回し始めていた幻のフィルムが今でも何処かに存在しているという伝説もある)しなければならなかったのだろうか、話し出したらこの種のテーマはきりが無いのでこの辺でこの話題は終わりにしよう。



前置きが長くなったが、そろそろ本題に入らなければならない。

キー・ブリッジを渡ったからと言って、キー・ブリッジをキーワードにするとは何と単純で、無責任な話ではないか。キー・ブリッジで出会った恋愛映画があるわけではないし、キー・ブリッジを挟んで両軍が対峙する戦争映画も見ることがない。

橋の名前の由来となったキーさんは[Francis Scott Key](#)と言って米国国歌([The Star Spangled Banner](#))の作詞をした偉い人なので、伝記映画の1本でも有るのかと一応調べることにした。残念ながら努力の甲斐もなく彼を主演にした映画どころか、ちょい役で登場する映画さえもなさそうなので、生涯を通して相当に物語性の薄い人物だったのかもしれない。しかし米国国歌だけは素敵な仕上がりがた。

しかし無駄に終わったかと思われた調査結果は映画ファンにとって思わぬ成果があった。Francis Scott Key Fitzgeraldという米国を代表する作家の作品群の中に“GREAT GATSBY”という小説が有り、ロバート・レッドフォード主演の“華麗なるギャズビー”(1974年)という邦題タイトルで映画化されている。Francis Scott Keyという名前が付いているのは彼(Francis Scott Key)が彼(Francis Scott Key Fitzgerald)の父親側の遠縁に当たるからだそうだ。

その後、某映画評論家の方からキー・ブリッジが実際に使われた映画が有るわよと言われ、恐る恐る見直してみた映画が有る。その名を“DEEP IMPACT”、SF超大作だ。

今更ながらに感動したのは、この映画の重要な役割を果たす米国大統領がモーガン・フリーマンが扮する黒人であったこと。長い間白人の中の白人が演じてきたアメリカ大統領役を黒人が演ずるというのはまだNYにツインタワーが聳え立っていた時代背景を考えると非常に勇気のいった事であろう。別に映画の先進性を語るつもりはないが、そういう意味でも所謂話題作では有る。

巨大隕石の地球接近に備え、ワシントン逃げ出す車の群れのシーンは圧巻でどのように撮影されたのかと今更ながらに興味深い。その方の説明によると、朝からこの橋を終日通行止めにして撮影されていたとか。DCからバージニア州に抜ける為の重要幹線道路であることを考えると“たかが映画”の為によくぞ許可が出たものだと映画に対する米国人の情熱に頭が下がる。

最近のアクション映画でアンジェリーナ・ジョリー主演の“SALT”もDCの街並み背景に激しいカーチェイスが見事に撮影されていたがキー・ブリッジは何故か外されていた(残念!)

流石にこれ以上の知恵も無いので、キーとブリッジを分けて幾つか映画を紹介してみよう。

ブリッジものでは圧倒的に職業柄・病からか戦争映画を思い出してしまう。“戦場にかける橋”、“トコリの橋”、“レマゲン鉄橋”、“遠すぎた橋”……。

子供の頃“アラビアのロレンス”という映画を何気なく見た。梅田のOS劇場というところでしか見られなかった“シネラマ”という大画面に憧れたからだ。音楽が素敵だった。砂漠に似合うこれ以上の音楽はこれからも現れないかもしれないとその頃から密かに思っている。

デビット・リーンという監督が作ったというので、同監督の他の映画も見てみたいとの強い思いから行き着いたのが“戦場にかける橋”だった。

日本軍がタイ・ビルマ鉄道建設に当たり英国軍捕虜の鉄道技術者から鉄橋建設技術を学ぶという筋立てである。

デビット・リーンという監督は個々の映画そのものは抜群に面白いのだが、背景の歴史事実の信憑性・真実性に乏しいというので有名な監督だそうである。



出所：http://ja.wikipedia.org/wiki/ファイユ:Bridge_over_River_Kwai.jpg

“アラビアのロレンス”では砂漠と駱駝以外は全部嘘と解説する輩もいる。

“戦場にかける橋”で登場する日本軍技術将校は皆でくの坊ばかりだ。しかし真実はというと当時国鉄(今のJR)技術マンの能力は既に世界一流で、山あり谷ありの日本国内は言うまでも無く、自然環境厳しい満鉄も独自に設計、建設している。今更英国に教を請う必要など全くなかった。しかし彼はこの嘘の物語から日本人と英国人の意地の張り合いを夫々の国民性を通じて見事に描き切って第30回アカデミー作品賞、監督賞、脚本賞、主演男優賞、撮影賞、作曲賞、編集賞を総なめ受賞した。

それ以来、映画は事実関係がおかしくても一向に構わないと思っている。真実を追究する余り面白くない映画を見せられることこそ大変迷惑な話なのだ(マイケル・ダグラスの“アメリカン・プレジデント”を見た某映画評論家が“こんな事現実に起こり得ない”と評価していたのに無性に腹が立ったことがある)。

“レマゲン鉄橋”という映画は、テレビシリーズ“ナポレオンソロ”で一躍有名になったロバート・ボーンがドイツ軍将校役で主演するという事で有名になった映画である。ベルリン陥落間近のとある国境の鉄橋を守るドイツ軍守備隊に鉄橋破壊の命令が下る。しかし戦場から送り返される大量のドイツ軍傷病兵を後方へ送り届ける為にはこの鉄橋を一時間でも長く持ち堪えねばならない。ロバート・ボ



ーンが扮する守備隊長は独自の判断で鉄橋爆破を遅らせるが、米軍が爆破前に到着、仕掛けられた爆薬を取り外し米軍戦車軍団の進軍が始まる。守備隊長は多くの友軍を救うも命令違反で銃殺刑となった。

“真の男の仕事とは何か”と問いかけられているようで頷けた映画だった。サラリーマンなら生涯一度や二度同じような体験をするのではなかろうかと思った。それさえも理解できない人がいて会話を困ることがある。

次は多少苦手なキーの方だ。

“KEY”と書けば明るいイメージがする。一方“鍵”とう文字は何故か自分には隠微なイメージが有る。

多分谷崎潤一郎の小説か小説をベースにした同名の映画のせいだと思っている。中学の頃、国語の教師が“肌”という漢字は何故か色っぽいと説明していたが、“肌”は何も女性の専売特許ではないと思ったのと同じで、人それぞれ感じ方が違うものである。

この映画は記録映画の最高峰となった“東京オリンピック”で有名な市川崑監督が作った(この映画も黒澤に最初依頼されたのだが、どういうわけか黒澤はこれを断っている)。

完全に遮断されたはずの空間に唯一覗ける隙間が有るとすればそれが鍵穴である。

この映画が無ければ、鍵穴は自分にとってもっと健全な存在だったかもしれない。映画は確かに罪な面も持っていると思う事があるのはこのせいである。

特に感受性の強い青少年には、想像以上に印象が強く残るのでお父さんお母さんは要注意。

洋物では“アパートの鍵貸します”はコメディとして作られたのだが、何故か鑑賞後哀愁が漂う。

今でこそ恐ろしくおばさん役が似合うシャーリー・マックレーン([Shirley MacLaine](#))がやたら初々しい映画でもある。(何故かやたら初々しく岩下志摩がデビューした木下恵介の“笛吹川”を連想するのは年のせいだろうか。……今思い出したがこの“笛吹川”も邦画を代表するブリッジの話だ。武田家滅亡の物語という意味では初めに出た“影武者”にも通じる。)

ところで彼女の出身地はなんと[バージニア州](#) [リッチモンド](#)なんだそうだが、ご存知だろうか。

という事で次回のキーワードは“バージニア州”という事にしたい。ちょっと易しかったかな。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第3回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

ちび〇子¹

「ミイラ取りがミイラになった」ぼちこ氏を指差して大笑いしていたのも、つかの間。「次回、バトンタッチはあなたね」「ええっ！そんな殺生な。二度も(会報に)登場したら暑苦しいではないですか！」「いやいや、大丈夫。リレーはペンネームだから誰にも(同人物とは)わからないよ」「でも、ひと月に二本も記事を書くのはちょっと…。勘弁してください」「その月はちょうど合併号だから、そんなに忙しくならないから大丈夫！」「でも、…でも、…」私としたことが迂闊であった。普段職場では同僚から「隙がない」と言われていても、ワインを片手に母国語で映画の話に花を咲かせていた私は全くの「無防備」であった。「じゃあ、よろしく！」Noとは言えず、あたふたしていた次第である。

前号で寄稿された黒澤ぼちこ氏、前々号の枝田淳氏は、自分とは比べものにならない映画好きである。その本数からして自分には到底及ばない数を見ておられる。自分のことを「映画ファン」と呼ぶことすら恥ずかしい。お二人が熱く語っておられる黒澤映画にしても、恥ずかしながら、アメリカに来てからその評価が高いことに気づき、あわてて見るようになった情けない輩(非国民?)である。

枝田氏はまた(おそらく共謀された黒澤氏も)弁護士顔負けの「ルール作り」の名人である。会報には殆どルールなど存在しないのだが、『十戒』(セシル・デミル監督、チャールトン・ヘストン主演)のごとく、連載の「10のルール」を作ってしまった。アメリカ人の知人・友人の中には、弁護士が多く、ダイエット(というか賭け)をするときも、事細かにルールを取り決め、「そんなことをしている暇があれば、運動でもした方が早く痩せるのでは」と思ってしまうが、映画ファン連載記事の十戒とは、驚きである。

第一部

私が映画好きになったのは、子供時代、テレビで淀川長治氏や水野晴郎氏の洋画劇場(吹替)を観て名作、佳作、駄作に触れてきたからだと思う。子供の頃はチャップリンからヒッチコックまで通常は映画館で上映されていないものも、電車に乗って自主上映をしている映画館を見つけては観に行ったものであった。校則の厳しい私立校で、通学途中の寄り道は禁止されていたが、〇〇〇座の3本立て千円(さすがに今はもう存在しない)など、小遣いで見られるものは、片っ端から観に行ったものである。

早く原語で台詞を理解したい一心で、英語を一生懸命勉強した。アメリカのTV番組が放映される時には、主音声(日本語)から副音声(英語)に切り替え、理解できないながらも英語で番組を見た。おかげで、英検などにも合格することができた。帰国子女の友人に囲まれ、一度も海外で生活したことのなかった私は、どうしても海外経験をしたかった。大学卒業後、某大企業に就職し、せつせと留学資金を貯め、親の猛反対を押し切り、ニューヨークに渡航。ただ、アメリカの土地を踏んだ瞬間、自分の英語力など赤ん坊のそれにも及ばないことに気が付くのに数秒もかからなかったが…。

渡米一年後、TVや映画のジョーク(英語)に笑えるようになった。言葉(特にジョーク)というものは、どれほど文法や語彙を勉強しても、社会・宗教的背景がわからないと本当に理解できない。今、アメリカの企業でアメリカ人に囲まれて仕事ができるようになったのもひとえに映画のおかげである。特に、映画を通じて英語のユーモアのセンスを身に付けたことは、職場で緊張感をほぐすのにとっても役に立っている。

第二部

ぼちこ氏から頂いたキーワードは「バージニア州」である。このキーワードを頂いた瞬間、私は不躰にも「〇〇だったらよかったのに！」と悪態をついた。日本では半径5メートル以内には近づけないほど一流企業のエグゼクティブに対してである！大変失礼であったと心から反省している。

【ルール1: キーワードに関連する映画の話】

バージニア州と言って連想するのは、『Mr. & Mrs. Loving』(1996年)という映画。白人と有色人種間の結婚を禁じたバージニア州法(Racial Integrity Act)に違憲判決が下された米最高裁判決 Loving v. Virginia, 388 U.S. 1 (1967)をもとに映画化された作品である。1958年バージニア州。リチャード・ラヴィングは白人、その妻ミルドレッドは黒人であった。当時、バージニアでは異人種間の結婚が禁止されていたので、二人はそれが合法として認められるワシントンDCへ行って結婚。ところが、バージニアの片田舎にある我が家(キャロライン郡【ルール2: アメリカに実在する場所】)へ戻るや、逮捕、投獄。そして25年間追放の刑に処せられた。そしてACLU(米国自由人権協会)の助けで訴えを起し、最高裁判で勝訴するというお話。

【ルール3: ためになる情報】

今でこそ、黒人(アフリカ人)と白人の間に生まれたオバマが大統領になってしまう時代ではあるが、異人種間の結婚が禁止された時代があったのだ。もちろん、このラヴィング判決によりそれが合法となったとはいえ、四十数年経った今でも、異人種間の結婚は全米でわずか7%とも言われている。どれほどリベラルな家庭でも、白人家庭の娘が有色人種のボーイフレンドを連れてくると、衝突や対立が起こったりする。友人の白人女性が黒人男性とデートしていると、全くの他人から様々な攻撃・嫌がらせを受けたと言っていた。人種って、アメリカ社会の根深〜い問題なのだ。昔流行ったTVドラマの『ルーツ』はアメリカ史上、最も暗い側面のひとつ奴隷制の問題を真正面から描き、社会現象とも言える大反響をまきおこした。子供ながらも衝撃を受けたのを覚えている。

【ルール5: 映画や俳優について気軽に語る】

『アパートの鍵貸します』(1960年)のシャーリー・マックレーン(バージニア州出身)、確かに初々しかった！ジャック・レモンもコメディ俳優ならではの哀愁を漂わせた演技、素晴しかった！シャーリー・マックレーンがバージニア出身ということは、その弟のウォーレン・ベイティもということになる。実在した犯罪者ボニーとクライドの人生を描いた『俺たちに明日はない』(1967年)は何度見たことだろう。それにしても、枝田氏のお父様の時代の方々が確立された洋画文化は見事だ。原題からは想像できないような邦題をつけ、映画を知らない一般の人が映画館に足を運びたくなるような経済効果をもたらしたこと確実だ。『The Apartment』が『アパートの鍵貸します』になったり『Bonnie and Clyde』が『俺たちに明日はない』という具合だ。字幕翻訳や吹き替え文化もしかり。

ウォーレン・ベイティといえば、ハリウッドのプレイボーイとしても女性遍歴が華やか。『草原の輝き』(1961年)で共演したナタリー・ウッド、『レッズ』で共演のダイアン・キートン、大西洋を渡って仏映画界のトップスター、カトリーヌ・ドヌーブからイザベル・アジャニまで、そうそうたる顔ぶれだ。アネット・ベニングと1992年に結婚してからは落ち着いているようだが。

【ルール4:強引にワープ】

アネット・ベニングは好きな女優の一人。『バグジー』(1991年)でウォーレン・ベイティと共演。とても綺麗な演技派女優だ。『アメリカン・ビューティ』(1999年)と『華麗なる恋の舞台』(2004年)でオスカー主演女優賞にノミネートされたが、どちらの年もヒラリー・スワンクがオスカーをさらってしまった。『キッズ・オールライト』(2010年)で、男勝りのレスビアン役を見事に演じ、再度オスカー主演女優賞にノミネートされたが、授賞ならず。いまだにオスカーをとっていないのは意外だ。ちりめんのように年相応の皺が満面に広がっていても綺麗なのは、やはり内面から溢れ出る彼女の魅力だろう。整形していない俳優を見つけるほうが難しいハリウッドで、アネット・ベニングは貴重な存在だ。

【ルール6:話の流れから次回のキーワードを定める】ということなので、次のバトンタッチのお相手〇〇さん【ルール10:次回の執筆者を指定】にはこのキーワード「南北(戦争)」をお願いしたい。ぼちこ氏に「バージニア州はイヤ!」と言った背景には、どうも自分の中で南部への偏見があったからだ。公民権問題に関する訴訟(判例)が数多く発祥しているのはどうも南部の州であるような気がしてならない。最初馴染んだ土地がニューヨークだったので、自分はやっぱりニューヨーカー(ヤンキー)なのである。(南北戦争中、南部では北部の人間のことをヤンキーと呼んでいた。)



ゲティスバーグ演説のリンカーン大統領
【ルール8:写真】

【ルール7:読むのに疲れない程度の量を目安とする】ということなので、もうそろそろ幕を閉じなければいけない。四頁にわたるたわ言にお付き合い下さり、大変感謝している。そして、このような楽しい連載の機会を与えてくださった、黒澤ぼちこ氏、枝田淳氏に深謝!

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第4回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

チェブ子

歴代の東西の名画に精通された今までの執筆陣とは異なり、わたしの映画へのこだわりは「B級」である。これには、「映画自体がB級」、「映画を観るシチュエーションがB級」の両方が含まれる。

愛すべきB級映画については後半で語るとして、まずは「映画を観るシチュエーションがB級」、ということでお気に入りの映画館について紹介したい。

最近は大規模商業施設に併設する形での大資本映画館が市場を席巻しているが、少し前までは個性豊かな映画館が存在した。中でもひとときわ思い出深いのが、10年ほど前に閉館してしまった早稲田の「ACTミニ・シアター」。1,800円位の価格設定でオールナイトで3本～4本立ての映画を上映するいわゆる名画座である。特筆すべきは、客席が1段の長さがとても長い雛段状になっていて、観客が寝そべて映画を鑑賞できること。夜の23時頃に開演し、暇な学生やサラリーマンが三々五々、好きな食べ物を持参して集まる。上映映画は大抵古い名作で、『サテリコン』、『フェリーニのローマ』、『8 1/2』等がかかるフェリーニ特集では、銀幕の中の怠惰なローマ人が寝そべりながら葡萄を食したり、吐いたりしているのを鑑賞しつつ、こちらも負けずに長々と寝そべて和風におにぎりとお茶を食す、という東西怠惰対決も実現できた。もちろんそのまま寝てしまっても誰も文句を言わないので、夜型・映画好きの学生には格好の場所であった。

環境がユニークという点では銀座のはずれにある「銀座シネパトス」も捨てがたい。ここでは、映画という「コンテンツ」と映画館という「ハコ」が完全に調和、一体化するという貴重な事象を体験した。その映画は低予算ながら大ヒットしたカナダ産のスリラー、『キューブ』。突然、小部屋(キューブ)が連なる異空間に放り出された男女が、様々な罠をかわしながら脱出を試みる、という一種の密室モノであるが、この小部屋が上下左右に「ががが」と移動する音が聞こえるという恐怖シーンにおいて、映画館と隣接する地下鉄・銀座線の轟音と共鳴し、さらには映画館の脆弱なつくりのために座席にまで振動が生じるのである。まるで自分が実際に小部屋に置き去りにされたかのような臨場感を高める効果が確かにあった。あまりに生々しい恐怖体験であったため、続編である『キューブ2』は今日に至るまで観ていない。

もう一つは、B級ではないが珍しい映画館ということで、京橋の「東京国立近代美術館フィルムセンター」を紹介したい。本センターは古い日本映画の保存・公開に力を入れていて、今では珍しい弁士やピアノ生演奏つき無声映画の公開を積極的に行っており、小さな映画美術館まで併設している。入場料500円という手軽さもあり、伊丹十三と桃井かおりの『夕暮れまで』等を観に行ったが、伊丹十三の若い頃の格好の良さつたらない。英語を巧みに操り、料理の腕前も一流、モノへのこだわりなどは最近の男性雑誌の比ではない。本当に早世が惜しまれる。

お気に入りの映画館の思い出は日本だけではない。イスタンブールで観た「休憩」入りのハリウッド映画『デスペラード』（注：長編だと必ず休憩が入るそうで、お菓子売りがやってくる）、クアラルンプールのふかふかのソファで観た世界アニメーションフェスティバル、ジャカルタでアメリカ人が主催したセミプライベート上演のウディ・アレン作品シリーズ、などなど。シリアではエジプトの映画が流行っているようで、ダマスカスの街角では、ちょっとふとっちょのコメディアンがよそ見をして歩いており、今にも落とし穴に落ちそう、というポスターを見た。シリアの子供たちも、ドリフよろしく「あっ！そこ危ない！」と教えてあげたりしながら観るのだろう。

現在の夢は「インドのローカルな映画館でチャイを飲みながらハリウッド映画三昧をする」ことである。インドは未踏の地であるため、近い将来ぜひ実現させたいと考えている。

さて、今回のキーワードは「南北(戦争)」。「南北？」と頭を抱えていたところ『戦争』でもいいんじゃない」とのありがたいお言葉をいただき、早速甘えさせていただく。

戦争と言えば『スターウォーズ』！小さい頃からスターウォーズファン、という方は多いと思うが、わたしにとっても特別な映画である。生まれてはじめて映画館で観た映画である、ということに加えて、ハン・ソロ役のハリソン・フォードはわたしの初恋の人でもあるからだ。ハン・ソロのあまりの格好の良さに痺れた未就学児のわたしは、買ってもらったパンフレットやスターウォーズの小ネタ本を枕元にならべて就寝し、「ハン・ソロに会ったら英語しゃべらないと。どうしよう」といらぬ心配までしていた。その心配は実際杞憂だったようで、本日に至るまで彼に出会う機会には恵まれていない。しかし、もし銀幕上で彼に出会わなかったら英語に興味も持たず、留学もせず、現在ワシントンにもいなかったかもしれない。

『スターウォーズ』の成功は、それまではB級とされていたSF映画の地位を高めたという名誉な評価がなされているが、その二番煎じである『親指スターウォーズ』は正真正銘のB級映画と言ってよいだろう。スターウォーズの登場人物を全て親指(文字通り、人間の親指)に演じさせるという身も蓋もない設定で、B級映画の王道であると言える。それ以前に、大ヒット作にあやかり、柳の下の二匹目のどじょうを狙おうというその性根がすでにB級である。

といういつも「B級映画の定義は？」と聞かれるのであるが、わたしなりの解答は「くだらない、トホホ感がある、にくめない、愛らしい作品群」である。時にはくだらなさすぎて哀愁が漂うものも含まれる。脱力系、という表現も当てはまるかもしれない。「ああ、もっと上手に作りたかったらうに…」、「ギャグを狙ったのに外してる…」、「このくだらなさにはわたしにしかわからないかもしれない…。こういった様々な感情を引き起こさせるような映画の総称である。言うまでもなく、ここで言う「くだらない」は最高の褒め言葉である。

そんなB級映画の中でのお気に入りは『アタック・オブ・ザ・キラー・トマト』である。ある日突然巨大化したトマトが次々に人々を襲う、というカルト的人気を誇るホラー映画で、テーマソングも非常にオペラティックで聴きごたえがある。また、映画の端々に観客が気づくか気づかないかの小ネタがちりばめられているのが秀逸で、複数回観ても楽しめる。例えば、冒頭では「ベストセラー『怒りのトマト(The Tomatoes of Wrath)』に基づき映画化」、などというテロップがさりげなく組み込まれていたりする(もちろん、『怒りのぶどう』にかけている)。続編である『リターン・オブ・ザ・キラー・トマト』には、

なんと売れる前のジョージ・クルーニーが出演。彼は女子学生にモテモテすぎてサイン会を催す、というベタな設定で登場するのであるが、現在の渋く洗練された雰囲気は全くなく、非常に野暮ったい。以前、各自好きなDVDを持ち寄って上映会をする、という会にドキドキしながらこのDVDを持参したのであるが、結果は惨憺たるもので、お義理で付き合っただけの方1名を除き、全員(主に女子大生)をこん睡状態に陥らせてしまった。みなさまの貴重な時間を奪ってしまい、今でも非常に申し訳なく思っている。

ジョージ・クルーニーに限らず、B級映画は思わぬ大スターの昔の活躍を垣間見られる場でもある。例えば、クリント・イーストウッドの初出演作が『大アマゾンの半魚人』の続編である『半魚人の逆襲』という映画であることをご存じだろうか。長年、この映画のことを忘れていたのであるが、先日ジョージア水族館の展示で「水に関する映画」特集をやっており、そこで両作が紹介されていたのを機に思い出した。ぜひともマイナーな西部劇等と2本立てで観たい映画である。

B級映画の2本立て、という設定は、現在ほど家で手軽に映画が楽しめず、映画館に行くことが特別のイベントだった時代を想起させて非常にわくわく感がある。この観客の心情をうまく掴んだのがクエンティン・タランティーノとロバート・ロドリゲスが監督した現代の2本立て映画『グランドハウス』である。「グランドハウス」とは、かつてアメリカに多く存在したB級アクション映画等を2本立て等で見せる映画館のこと。同作はこの形態へのオマージュで、両監督が製作した『デス・プルーフ』と『プラネット・テラー』の2本立てという構成で、映像的には、昔のフィルムがざらついたり切れて画像が飛んだりという演出をしてある上、映画の合間にご丁寧にニセの(実在しない)ほかのB級映画の予告編まで入れ込んであるという凝りよう。そのニセの予告編の一部が好評で、実際に映画化されるとかされないとかいう話も聞こえてくる。『グランドハウス』が気に入った方はぜひ『フロム・ダスク・ティル・ドーン』をご覧ください。同じくタランティーノとロドリゲスが共同で作った映画であるが、前半と後半がまったく別の映画のよう。予定調和という概念を完全に無視した思い切りの良い作風で、爽快ですらある。

少しハードな映画の紹介が多かったので最後はやさしい雰囲気のもの。ロシアで60~80年代に断続的に製作されたパペットアニメ、『チェブラーシカ』は、愛くるしいキャラクターが受けてチェブラーシカグッズが一時に出回った上、オリンピックでロシアのマスコットに選抜されたこともあり、ご存知の方も多いのではないだろうか。わたしはすっかりその可愛らしさに魅了され、映画館に何度も足を運び、グッズを買い占め、DVDを総勢20名ほどに貸すというプロモーション／布教活動を行った。それでも飽き足らずロシアにチェブラーシカに会う旅に出たところ、モスクワの映画博物館でたまたまアニメーション特集をやっており、映画で実際に使われた体長20センチほどのチェブラーシカご本人に直面し、写真や動画(先方は動かないのでこちらが動いた)を撮影することができた。ワシントンに来てからも、ロシアに出張に行くという世銀マンをつかまえてはチェブラーシカのぬいぐるみの入手を依頼したりしている(写真参照。おなかを押すとロシア語で歌ったりしゃべったりする)。



ロシア・東欧は良質なアニメの宝庫である。『雪の女王』は50年代の作品とは思えないほど精緻な動きが実現されているし、チェコのヤン・シュヴァンクマイエルのモーションアニメもあまりに良く出来過ぎていて感涙ものである。彼の作品にはダークな作風のものも含まれるが、軽めのスタートには『肉片の恋 (Meat Love)』などいかがだろうか。ひと塊の肉からよく切れるナイフで切りだされ、生命を吹き込まれた2片の肉。その場で恋に落ち、あはは、うふふ、と追いかけてこをしたり小麦粉を掛け合ったりと、初々しい交流をするもその結末は、1分ほどの小品で、動画サイト等でも簡単に見つかるため、ぜひご覧になって頂きたい。

これらのほかにも、東宝の『国際秘密警察・鍵の鍵』を勝手に英語に吹き替え、フィルムの順番を差し替えてまったく別のコメディに仕立て上げたウディ・アレンの初期作品『ホワッツ・アップ・タイガー・リリー』(「スキ・ヤキ」、「テリ・ヤキ」という名前の美人姉妹が登場する)、日本でも大ヒットした『ムトゥ』シリーズよりぜったい面白いインド映画『ラジュー出世する』、脱力系ロシアSF『不思議惑星キン・ザ・ザ』等紹介したいものはたくさんあるのだが、「読み手が疲れない程度の長さで」というご指示があったため、このあたりで筆を置く。

世の中にはコメディ、ホラー、ドラマ等、様々なB級映画があるが、共通しているのは「ははっ」と笑える、息抜きの部分を一番重視しているという点ではないだろうか。ほっとするひと時を持つためにも、B級映画のファンになってくださる方がひとりでも増えればと思う。

最後に次のキーワードであるが、B級映画の真髄ともいえる「息抜き」でお願いしたい。もちろん、内容はB級映画に関係なくても大丈夫。…抽象的かな？

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第5回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

かっぱ谷

いきなりで恐縮ですが前回のチュブ子さん同様、私も同じく「B級」ファンであります。前回の本稿でチュブ子さんは「B級」の定義を“くだらない、トホホ感がある、にくめない、愛らしい作品群”とされていましたが、そこに“マニアック”という定義を付け足して頂きたいと思います。それはいかに普遍的なテーマを扱ってしようが、マニアックな視点・角度で取り扱えばすぐさま「B級」なるということがあります。例えば「トゥルー・ロマンス」という作品は若者同士の一途な恋愛という普遍的なストーリーを描いており、脚本・監督・映画会社すべてがメジャーであるにも関わらず、強烈な脇役陣のキャラ付と過度な暴力描写によってなどはB級映画臭がプンプンする作品に仕上がっています。逆に「ビューティフル・マインド」などは統合失調症による幻覚に苦しみながら“ゲーム理論”を生みだし、ノーベル賞受賞した数学者というマニアックなストーリーでありながら、視点としては彼と奥さんが共に苦難を乗り越えていく過程をメインテーマに据えたことで、メジャー映画として成りたっているといえましょう。皆さんにもそんな“マニアック”な「B級」映画の楽しみをご紹介していきたいと考えております。

今回、いただいたテーマに沿って“息抜き”ができる「B級」映画を考えてみました。皆様も多忙な毎日の中、飲みに行くなり運動するなりいろいろな息抜きの仕方をされていると思います。しかし、手段はどうかあれ、「息抜き」の方法自体は大きく二種類に分けられるのではないかと考えております。

- 好奇心を満たす息抜き — 普段接することが無いものに触れることで日常から解放される。旅行、読書、観劇など。
- 何も考えない息抜き — ただ単にボーっとする。家でゴロゴロしたりする場合やリゾートへの旅行など。

映画を見るということは日常を離れ、気を遣うことなく自分の時間を楽しめるのでどちらの息抜きの方法でもできます。それでは、それぞれの息抜きの仕方に適した映画をご紹介していきたいと思っております。

【好奇心を満たす「息抜き」のためのB級映画】

普段接していない世界を垣間見るという意味ではドキュメンタリー映画は魅力的なのではないでしょうか？メジャーなドキュメンタリー映画といえばレニ・リーフェンシュタールの「オリンピア」三部作、市川昆監督の「東京オリンピック」など大イベントを記録する目的も兼ねた作品か、サーフィン映画の元祖である「エンドレス・サマー」や最近ではフランス映画の「皇帝ペンギン」など自然美や映像美を追求した作品がイメージとしては強いと思います。映画が映像記録媒体として機能していた古き良き時代を思わせるのはこういった映画なのではないかと思っております。

一方、B級ドキュメンタリーとなると予算の関係もあり、監督の工夫やセンスで社会問題や人物像を

深く掘り下げる、体を張った映画が多くなります。古くは原一男監督の「ゆきゆきて、神軍」や前述のリーフェンシュタールの人生を描いた「レニ」など、かなり踏み込んだ映画が多いのも特徴です。しかしながら近年ではマイケル・ムーア監督（「ボウリング・フォー・コロンバイン」、「華氏911」など）、モーガン・スパーロック監督（「スーパー・サイズ・ミー」）、アル・ゴア元副大統領（「不都合な真実」）がB級的な手法でドキュメンタリー映画を作り、そのメッセージにより問題意識をもったという人も多かったと思います。一方で、これら一連の作品に関しては論文を書いているかのごとく、自分の主義・主張を表現するのに映画という媒体を使ったに過ぎないという批評や編集や提示しているデータが偏っており、恣意的であるとの批判も多くみられます。この流れから、自分自身も含め、ドキュメンタリー映画に対してちょっと胡散臭さを感じている方も増えているように思います。そんな中、マニャックな世界から生々しい人間ドラマを切り取って、鮮やかに見せてくれる二つの作品をご紹介します。

まずは森達也監督による「A」。この監督の作品にはあまり主義主張が感じられず、裏側を見たいという欲望をどんどん満たしていく感じの印象があります。「A」という作品はオウム真理教の広報部長に密着して教団内を撮影したものであります。一応、その当時のオウム真理教に対する一辺倒な報道に違和感を覚えて撮影したとか言っていますが、多分そこまで言われている人々はどんな人たちなんだろうと思って訪ねてみたら入れちゃった — 実際はそんな感じなんではないかと思ってしまう感じです。見どころは教祖・幹部による凶悪犯罪を知った信者の揺れ動く心情と、彼らを取り巻く外部の状況です。特にこの映画を有名にしたのは警察による「転び公妨」と呼ばれる別件逮捕の実態が映像記録として残った点です。信者にしつこく付きまとい、触れたか触れてないか近づいた段階でわざと警察官自ら転び、公務執行妨害で逮捕する瞬間が捉えられているのです。後ほど逮捕された信者は無罪になりましたが、一方で警察によるこのような違法な手段が映像として残ったという点で大変話題になりました。この監督は他にもTVで「ミゼット・プロレス」「放送禁止歌」「ドキュメンタリーは嘘をつく」とタイトルからもよく制作できたなといった秀逸かつマニャックな作品群を残しているのでも是非こちらも見ていただきたいと思います。

二作品目は「チャレンジ・キッズ（原題：Spellbound）」です。これは全米スペル暗記大会に出場する8人の子供たちを追ったドキュメンタリーです。この8人の子供たちが本当に個性的、かつ魅力的。家族総出で応援しており、家庭教師をつけてトレーニングした上にインドで祈禱師を1,000人雇い優勝祈願するインド人家族。ひたすら喋り捲り「オレが優勝する」と自信満々にいう奇怪な白人の子供。真面目に勉強し、コツコツと積み上げる子供。「知らんうちに全国大会に行ってた」と親がびっくりするくらい気負いの無い子供。様々な人間模様を見せてくれます。それぞれの思いを抱いて臨んだ全国大会そのものは本当に筋書きのないドラマ。この監督は一生分の運を使い果たしたといってもいいぐらい、ミラクルな展開を見せてくれます。ネタバレ要素を含んでしまいましたが、個人的には海外で子育てをしている親として、アスリート並みにトレーニングをし、祈禱師まで雇っているインド系移民の子供がつかずいた単語が“ダーズリン”であったことにドラマを感じざるを得ませんでした。心に色々な思いを残してくれる作品だと思います。

【何も考えない「息抜き」の為の映画】

ドキュメンタリーを通して知らない世界を覗いた後は、もう何も考えなくてもいいような映画をご紹介します。何も考えなくてもいい映画というのは逆にいえば、真面目に見ては損をする

“しょうもない”映画とも言えましょう。前回でも数々の“しょうもない”映画が紹介されていましたが、今回はバイオレンスに焦点をおいてご紹介したいと思います。バイオレンスと聞くと、“暴力を助長するのではないか”とか“教育上宜しくない”と言ったご意見もあるかと思いますが。またバイオレンスなんて息抜きにならない！という方もいらっしゃるでしょう。

しかし、バイオレンス映画は何も考えない息抜きに最適な要素を持っているのです。たとえば、大したストーリーがないとか、主人公は死なないとか、最後は勝つに決まってるとか、15発しか入らない弾倉なのにいつまで撃ってんだとか、色々あるわけです。もちろん、実際にはこのコラムの読者の皆様には紹介させていただく映画をお子さんと一緒にご覧になるのは止められたほうがよろしいかと思いますが、大人が憂さ晴らしにみるにはお勧めする次第です。しかもただ単に暴力を描写するのではなく、(笑えるほど)友情であるとか男のかっこよさを追求した作品をご紹介します。

今回、ご紹介したいのは「男たちの挽歌」シリーズ、「デスペラード」「クライング・フリーマン」です。私はこれら作品を不動の“カッコつけ三作品”と呼んでおります。

まずは「男たちの挽歌」ですが、言わずと知れたジョン・ウー監督（「ブローケン・アロー」、「フェイス・オフ」など）、チョウ・ユンファ、レスリー・チャンの出世作であります。なぜか主人公はこの二人ではなく、ハゲたおっちゃんなのですが、とにかく撃つ！！二丁拳銃で撃つ！！機関銃で応戦されているのに主人公には一発も当たらない！！映画の最後のほうではいつしか禿げたおっちゃんもカッコイイと思わせるほどのパワーがこの作品にはあります。しかも泣ける。大変お勧めです。シリーズ二作目である「男たちの挽歌2」では、禁断の双子ネタで強引にキャラを生き返らせたり、撃たれて死ぬエキストラの人数が多すぎておかしなことになっていたりとちょっと色々“荒い”作品ですが、最後の銃撃戦ですべてOKです。相変わらず禿げている主人公が30発以上撃たれても死なないというゾンビ並みの生命力で、最後はポーズも決めてくれます。

「男たちの挽歌3」は実は全然違う映画を無理やりつなげて三部作にしているという、ハチャメチャなマーケティング戦略でつけられたタイトルです。やはり禿げたおっちゃんが主人公では辛くなったのか、チョウ・ユンファが主人公になっております。派手なアクションとちょっとキモいぐらいの男の友情が見どころの映画です。「マトリックス」のウォシャウスキー兄弟やタランティーノ、スコセッシ監督をとりこにしている「男たちの挽歌」シリーズ、是非見ていただきたい。

二番目はこれまたタランティーノ監督に見出されたメキシコの気鋭監督、ロバート・ロドリゲスによる作品です。恋人を殺され、自分にも重傷を負わせた麻薬王、“ブッチョ”を探し求めるさすらいのギタリストが主人公です。改めて文字に起こした段階でバカバカしいぐらいの設定ですが、これがカッコイイ。主演のアントニオ・バンデラスは常にうっすら汗をかいており、さりげなさなど微塵もない濃い演技を披露しております。ストーリーもギャグなのか本気でいいと思っているのか分からないレベルで、もうこの映画もとにかく撃つ！！援軍を頼んだら来たのがギターケースにバズーカを仕込んだ奴だったり、足をへし折られたやつがその午後にはギブスして走ったり、リアリティーとは真逆のベクトルへ躊躇いもなく突っ走る様には快感すら覚えます。



三番目の映画は「クライング・フリーマン」という日本の漫画原作のハリウッド作品です。主演はあのマーク・ダカスコス！と言っても私もググるまで名前すら知りませんでした。米国版“料理の鉄人”であるIron Chef USAのコミッショナー役(鹿賀丈史の甥という設定)をやっている人と言ったほうが分かる人は増えるかもしれません。設定からして“中国マフィアによって殺し屋として洗脳された主人公は、殺すたびに洗脳状態が一時解け涙を流す”といういかにも小池一夫原作らしい設定です。脇役に島田陽子、加藤雅也、マコ岩松を配し、無駄な豪華さで封切ったものの鳴かず飛ばずであった記憶があります。しかし、とにかくアクションが素晴らしい。特にマークの身体能力を極限に生かしたアクションは美しいとさえ言ってもいいかもしれません。そのアクションだけでも見る価値は十分あるかと思えます。その彼がなぜIron Chefなのか...聞いてはいけない大人の事情があるのかもしれません。毎回オープニングで披露されるバック転がアクションスターとしてのプライドの片鱗が見える瞬間ではないでしょうか。

二週続きのB級映画づくしによって読者離れを危惧しておりますが、暇つぶしの一助になれば幸いです。さて次の方へのキーワードは、ご紹介させていただいたバイオレンス映画にちなんで、「トラウマ」とさせていただきます。怖かった、銀幕の中の人に敵わないと思った、など色々あると思いますので次回からは読者として楽しみにしております。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第6回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

ぽっちみみ

ワシントンDC在住の映画好きが順番に執筆しているこのシリーズ、第6回は私、ぽっちみみが「普通の視点」で映画について気ままに語りたと思います。前号、前々号と2回に渡り、ちび〇子氏、かっぱ谷氏がB級映画について熱く語っておられましたが(非常に奥が深い!)、私は両氏のようなハードコアな映画ファンではなく、面白そうな映画が封切られると映画館に観に行くような映画ファンです。自分を映画ファンと呼ぶのも気が引けます。しかし少々マニアックな内容が続き、読者離れが気になるところでもありますので、今回は多くの方に楽しんでいただけるような映画数本と注目の俳優さんたちをご紹介しますと思います。

今回のキーワードは前号担当者のかっぱ谷氏にご指定いただいた「トラウマ」です。年明け一本目としてはちょっとアレな感じもしますが、第1回の執筆者、枝田淳氏が制定された10のルールの中の1つ目に、【ルール1:前号で指定されたキーワードに関する映画等の話で書き始めること】とありますので、空気を読むことはせず、はりきって参ります。

私にとってトラウマになっている映画は2本あります。まず1本目は「フラッシュダンス」(原題:Flashdance、1983年公開)。言わずと知れた名作です。主演のジェニファー・ビールの切れのいいダンス、挑発的な振り付け、キャッチーなBGM、かっこいいレッグウォーマー、どれをとっても文句なし。椅子を使って踊る主人公が上から大量の水を浴びるあの名シーンは、20年後の2003年にアメリカ音楽界のディーバ、ジェニファー・ロペスがミュージックビデオの中で再現しました。

この名作が日本で公開された1983年夏のある日、当時小学校低学年であった私は母親と近所に住む太田さんに連れられ街の映画館へと繰り出しました。涼しい映画館でスクリーンいっぱい広がる夢のようなエンターテインメントにすっかり魅せられた女3人。興奮冷めやらぬまま、「レッグウォーマー、私も買おうかしら」などと話しながら当時の国鉄に乗って帰宅すると、そこで私たちを待っていたものは…家中、足の踏み場もないほどに埋め尽くされた衣類、雑貨、書類…引き出しという引き出しはすべて開けられ、入っていた物はすべて引っ張り出されていたのです。

「空き巣に入られたわ!」と叫ぶ母。110番通報する太田さん。締め切って蒸し暑くなっていた家の中、どこもかしこも物凄い勢いで荒らされている光景はあまりにもインパクト大。この体験から、まだ幼かった私の脳内には「フラッシュダンスを観る時は空き巣に注意」という警告がインプットされ、これ以降この名作を見るのを躊躇するようになってしまいました。

この空き巣事件、本稿の趣旨から脱線しますが、続きが気になる方のためにオチまでご説明します。

通報してからしばらくすると警察の方々が続々と到着しました。テレビの刑事ドラマでよく見る、あ

の鑑識班の登場です。家の外回り担当の人たちは犯人の足跡と侵入経路を捜索。家の中担当の人たちは銀粉をポンポンして指紋採取です。そしてちょっと偉い風の方は母に事情聴取していて、何時から何時まで家を空けたのか、すべての戸は施錠されていたのか、何か無くなっている物はないか、などと大人の会話をしています。

目の前の展開にすっかり心躍らされた私は、指紋採取係に密着し捜査に参加。指紋の採り方を教わったのです。と、ここで犯人の指紋が出ることも出ることも。素手でいろいろなところをべたべたと触ってくれたおかげで、犯人は2人組みだということが判明しました。また、その犯人たちは裏に面している窓を割り、その窓の真下に置いてあった金庫を踏み台にして(笑)家の中へ侵入したことも分かりました。そして気になる盗難被害ですが、冷蔵庫で冷え冷えになった缶ビール2本とハムのみ(驚)。つつこみどころ満載の犯人グループです。

こんなゆるゆる犯人グループなどすぐに捕まるとタカをくっつけていたのですが、うちの飼い猫一匹のみが目撃者だったということもあり、その後犯人に結びつく有力な情報が得られず捜査が長引いていきます。また犯人が戻ってくるのではないかと、その時に一人で留守番していたらどうしよう、などと小学生の私は不安な思いで毎日を過ごしていました。そして秋風の吹くある日の夜のこと。母と一緒に帰宅すると、玄関に警察からの伝言メモが一枚。「去る〇月〇日に起きました盗難事件の被疑者を逮捕しました。つきましては下記までご連絡ください」聞くところによると、捕まったのは中学生男子2人組だったそうです。かくして平穏な日々が戻ってきたのですが、それ以降私がフラッシュダンスを観ることはなくなったのです。

トラウマになっている映画の2本目は、「幻影師アイゼンハイム」(原題:The Illusionist、2006年アメリカ公開)。エドワード・ノートンとジェシカ・ビール主演、ポール・ジアマッティ助演で、幻想的な映像が印象に残るこの作品は、第79回アカデミー賞撮影賞にノミネートされました。この作品は19世紀末のウィーンを舞台に、イリュージョンを見せて観客を魅了する幻影師(ノートン)と公爵令嬢(ビール)が身分の隔たりを越えて惹かれあうラブストーリー。なのかと思いきや、物語は殺人事件を機にサスペンスへと変わっていきます。そして終盤では誰もが驚く展開に。ノートンのミステリアスな演技と最後まで結末がわからないすばらしい脚本。間違いなくお勧めの一本です。まだご覧になっていない方はぜひ今度手にとってみてください。

この作品が封切られて間もない2006年のある日、当時すでにワシントンに住んでいた私は友人と一緒にベセスダにある映画館Bethesda Row Cinemaに向かいました。客席が暗くなり物語が始まると同時に私たちはすっかり19世紀のウィーンの街に入り込みます。観客はみな、素晴らしい映像、幻想的な音楽、俳優陣の卓越した演技に酔いしれながら、目の前に広がるサスペンス劇にのめり込んでいきました。

そして物語は佳境を迎えます。すべての点がつながり、いよいよ真実が暴かれる場面です。客席には緊張感が走り、聴衆の目と耳はスクリーンに釘付けです。私も例外ではありません。どういうカラクリなのか、次はどうなるのか、物語はどのように終わるのか、実はこうなのかもしれない、と様々な思いが頭の中をグルグル回っています。

とその瞬間、そんな私に隣に座っていた友人が不意に耳打ちします。「わかった！あの人か実はこうなのよ！」 えー！！ここでまさかのネタバレ発言です。うなだれる私。「うん、そうだろうね」と私は力を振り絞って返すのがやっとです。目の前で繰り広げられる物語はそんな失意の私を置き去りにしたまま急展開を迎え、めでたく友人の予想通りの結末を迎えたのでした。

思わず耳打ちしたくなった友人の気持ちは十分に分かります。それだけ手の込んだストーリーなのです。しかしそのネタバレ発言により、サスペンス劇は私の前で一気に色褪せ、すべてが明かされたときのスッキリ感は半減です。いい作品に出会えた嬉しさと何とも微妙な後味が残った一夜なのでした。ちなみに、この友人とはコメディやチック・フリック(Chick Flick、女子向け恋愛映画)と一緒に観ることにしています。皆さん、映画鑑賞の際は途中でオチがわかってもしっかりと心の中にしまっておきましょう。

さて、この作品で主演しているエドワード・ノートンですが、ご存知のとおりニヒルな役や凶暴な役など幅広い演技ができる素晴らしい俳優さんです(私の勝手な思い込みですが、日本人俳優で言うと堺雅人さんが同じカテゴリーに入っているでしょう)。そんなノートンが知的障害者(を装った)役を演じたクライムサスペンス映画、「スコア」(原題: The Score、2001年公開)もお勧めの一本です。本作品はロバート・デニーロ主演で、マーロン・ブランドも出演しています。作品序盤のノートンの演技に注目です。

ノートンはボストン生まれですが、高校時代までメリーランド州コロンビアで過ごしました。そう、ワシントンDCエリアが誇るローカル俳優なのです。大学では日本語も学び、卒業後は日本で仕事をすることもあったそうです。ワシントンDC在住の日本人として応援したい俳優さんの一人です。

そしてローカル俳優でもう一人忘れてはならないのがサンドラ・ブロックです。ブロックはバージニア州アーリントン出身で、ノートンと同様、高校時代までこの地域で過ごしました。バージニア・スクエア駅から程近い、運動が盛んな公立高校でチアリーダーとして活躍したそうです。その後ブロックは大学進学のためにDCエリアを離れ、ブロードウェイ、ハリウッドに進出。アカデミー賞女優へと飛躍していきました。



女優サンドラ・ブロックが80年代に通ったワシントン・リーハイスクール (バージニア州アーリントン)



著名人からの寄付のおかげで(?)現在は新設された校舎が立ち並ぶ。



運動が盛んな学校らしく、広大な敷地には本格的な陸上競技用トラック、フットボールフィールドと観客スタンドが完備されていた。ブロックもここでチアリーディングの練習をしたのだろうか。

ブロックはもともと等身大の女性の役を演じることが多く、親しみが感じられる女性、「Girl Next Door お隣さんの女の子」として有名になりました。DCエリア在住の私たちにとって、ブロックはまさに近所に住んでいた女の子です。名実ともに身近に感じられる女優さんとして、これからの活躍に期待したいと思います。

ブロックはこれまで様々な話題作に出演してきましたが、アクション、コメディ、シリアス系など、どんな役でもこなせる女優さんという印象があります。そんな彼女を一躍有名にしたのが、1994年公開、キアヌ・リーブス主演の「スピード」(原題: Speed)。また、シリアス系の出演作ではマシュー・マコニー主演の「評決のとき」(原題: A Time to Kill、1996年公開)があります。こうしてみると、ブロックは、リーブスやマコニーなど当時新人だった俳優をスターダムに押し上げたヒット作に出演しているのがわかります。このような女優さんが次は誰と共演するのか注目するのも映画の楽しみ方のひとつですね。

昨年3月に起きた東日本大震災を受け、ブロックはアメリカ赤十字の震災・津波基金に100万ドルを寄付したと報じられました。また、ノートンは自身のホームページで多くの人々に寄付を呼びかけました。我々がローカル俳優に限らず、去年は多くのハリウッド俳優が日本に手を差し伸べ、支えてくれました。そして今年日本がアメリカに桜を寄贈してから100年の節目の年となります。ワシントンDCでは様々な文化交流行事が企画されており、今春はいつにも増して日米の絆を深く感じることができるでしょう。

ということで、リレー形式でお送りしているこの連載。桜のつぼみが膨らむ頃に発行される次号のキーワードは「日米友好」とさせていただきたいと思います。日本を描いたアメリカ映画、桜が印象的な映画などをご紹介いただけるのを楽しみにしつつ、ここで筆を置くことにいたします。最後までお付き合いいただきありがとうございました。

【まとめ: 今回ご紹介した映画】

- フラッシュダンス(原題: Flashdance、1983年公開)
- 幻影師アイゼンハイム(原題: The Illusionist、2006年アメリカ公開、2008年日本公開)
- スコア(原題: The Score、2001年公開)
- スピード(原題: Speed、1994年公開)
- 評決のとき(原題: A Time to Kill、1996年公開)

桜寄贈100周年記念特別企画 「映画で語るワシントン桜寄贈100周年」

“ワシントンで映画を語る会”のメンバーによる共同執筆

1.はじめに

“今年は何の年”とワシントン地区在住の者が問われれば、ほとんどが“日本が桜を米国に寄贈、植樹してから100周年を迎える年”と答えることと思う。本コーナーでは、これまでワシントンの映画好きによるリレー執筆で映画に関する話題を提供してきたところであるが、今回は 通常とは趣をかえ特別企画として、桜寄贈100周年に関わる映画の話題等を提供し、微力ながらこの記念すべき年の節目の月を盛り上げることにした。

実は、昨年の7月に本連載が開始されてからその執筆者やワシントン地区在住の映画好きにより“映画を語る会”なるものができている。そのメンバーは、ハリウッドものからインディ、或は、黒澤や成瀬、更に怪獣物から超B級映画までと幅広い分野をカバーしているため、早速「ワシントンの桜」に関連する映画情報について照会したところ、意外に苦戦！！日本の映画では桜を題材にしたもの星の数、桜の数ほどあれども、ワシントンの桜に関するものは極めて少なく、また、外国の作品では、SFや怪獣と桜の親和性が良くないのでその分野ではないことは当然としても、数あるワシントンで撮影された映画の中にも、あの印象的なワシントンの桜のシーンは見たことがないとか。ワシントンの桜に限定すると関連映画が極めて少ないことが判明し、あわや本企画は“没”の瀬戸際に。



ワシントン記念塔と桜：ワシントンで撮影された映画にはこうした映像が多数登場するはずと始めた企画であるが、

しかしこの程度の事で諦めては、桜をこの地に咲かせるまでに幾多の困難にも関わらず決して夢を諦めなかった、シドモア女史、ファアチャイルド博士、高峰譲吉博士などなどに会わず顔が無いと、粘り強くワシントンの桜が出てくる映画探しを続けるとともに、ワシントンの桜に限定せずに、桜の映像が印象的な映画(但し、日本の映画除く)や、ワシントンの桜を「日米友好」の象徴として捉えそのテーマに沿った映画も含めることとし、本企画を実施とすることとした。(前回執筆者から指定されたキーワードも「日米友好」。)

2.桜寄贈100周年記念関連映画大総括

まずは、日本から米国への桜寄贈の関連映画としては、日本のものでは「Sakura Sakura - サムライ化学者高峰譲吉の生涯」及びその続編「TAKAMINE アメリカに桜を咲かせた男」がそのものズバリの作品としてあり、また、続編で主題歌を歌っていた白井貴子(バレーボールで活躍した選手ではない)が監督第一弾として、30年以上に渡り米国の桜植樹に奔走したエリザ・シドモア女史

の生涯を綴る「サムライガール エリザ・シドモア」を撮影中との話もある。しかしながら、このテーマでの外国映画は残念ながら見当たらない。

一方、ポトマックの桜の映像が登場する映画については、前述したように当会会員の誰もが思いあたらないということから、あまり印象に残るような使われ方はしていないようだ。確かにキャピタル、ホワイトハウスは言うに及ばず、世界銀行のビルなどは見たが、あの桜が出てきた記憶はない。しかし、ワシントンで撮影された映画自体は、アカデミー受賞作品の「フォレストガンプ」から、「JFK」などの大統領物、「ハンニバル」などのサスペンス、更には「トランスフォーマー」、「マイノリティレポート」などのSF、アクションものに至るまで結構多いので、桜の映像も必ずあるはずと考えて更にクエストは続く。

まずはワシントンでの映画撮影誘致を支援するフィルム・コミッションの役割を担う“DC Film Office”を探し出し、何度も電話及びメールで問い合わせをするも、返事すらなし。よってここは諦めて、次にワシントンの桜祭りの総元締のような、“National Cherry Blossom Festival”事務局に問い合わせたところ、いろいろ親切に調べてくれたが、映画情報はなし。その代わりにポトマック公園での撮影の際に許可を出す“US National Park Service”のベテラン担当者を紹介された。これが最期の切り札と直接お話を伺ったが、彼曰く、ドキュメンタリーではいくつかあったものの、私の知る限り映画の撮影がされたことはない、とか。以上の調査結果と、質量ともに充実した当会会員の一人もそのようなシーンに記憶がないという話などから、ワシントンの桜の映像を使ったアメリカの映画はないとの結論に至った。しかし、そんなことがあっていいのか？私が監督としてワシントンで映画を撮影するなら、必ずあの桜のシーンを使うのだが... アメリカの映画関係者にとってはあの桜に私たちが感じているような価値を見いだしていないのか、まったく不可解な結果となってしまった。

さて、気を取り直してその他、ポトマックの桜に関連する映画のお話としては、その実現に尽力されたのは人物として忘れてはならないのがタフト大統領夫人であるが、その夫のタフト大統領はオハイオ州シンシナティ出身、今や映画界の巨匠、スティーブン・スピルバーグも同じ出身地。また、桜がポトマック沿いに植えられた1912年には、何とあのタイタニック号沈没事故があり、この事故を映画にしたのはご存知「Titanic」。また、寄贈された桜が育ち第一回桜祭りが行われたのは15年の後の1927年になるが、この年にはリンドバーグが大西洋無着陸単独飛行成功しており、それを映画にしたのは言わずと知れた「翼よ、あれが巴里の灯だ」である。

外国の作品で桜自体の関連映画としては、インターネットで「Cherry Blossom」で検索すると、そのままの題名のドイツ映画「Cherry Blossoms(Hanami)」があり、日本のお花見のシーンが多くでてくる。アメリカ映画ではタイトルにCherryが付く映画はかなりあるが、桜ではなく別の意味で使われておりろくな物がない。なぜかSFアクションもので、シャーリーズ・セロン主演の「イーオンフラッシュ」のラストあたりに桜の森でのアクションシーンあったように記憶しているが、日系の監督だった



イーストポトマックゴルフコースの14番: グリーンが桜に囲まれており、ゴルフをしながら花見ができる。

からだろうか？ 目新しいところでは、今年のアカデミー賞短編ドキュメンタリー映画部門にノミネートされた、イギリス人監督による東北大震災関連映画「The Tsunami and Cherry Blossom」には桜が心の支えとして登場する。(残念ながらアカデミー賞受賞はならなかった。)

ここで花としての桜から離れて、ワシントンの桜は“日米友好のシンボル”という切り口で搜すと、日米友好に関連する映画としては、なつかしいところでは「レッドサン」から、「カラテキッド2」、「ブラックレイン」、「ミスターベースボール」、「ラストサムライ」、最近では「ラーメンガール」などがある。

3.関連映画について語る

それでは以上に紹介したものの代表例について、それらを実際に観たことがある“映画を語る会”の会員に少し詳しく語ってもらった。

1)「Sakura Sakura」 黒澤ぼちこ

桜寄贈100周年を迎える2012年春が近づくに従って、この桜に深く関わった高峰譲吉にまつわる伝記映画への関心が急速に高まっているように思う。これらの映画を見るまでは高峰博士が富山県出身である事も、高峰の妻が米人である事も知らなかったことを思うと映画の力の偉大さを改めて知らされた感じだ。

高峰譲吉を主人公として扱った「Sakura, Sakura — サムライ化学者高峰譲吉の生涯」の監督を勤めた、市川徹監督は1990年代はアダルト映画で一世を風靡し、2000年代に入ると一転、徹底してヤクザ映画路線をひた走り、2010年代は一環して高峰にのめり込むという日本を代表する風変わりな監督の一人だ。(黒澤とは違う)「Sakura, Sakura」(2010年)の翌年に公開された「TAKAMINE — アメリカに桜を咲かせた男」(2011年)でも監督を務め、また、別の高峰もの、「フレンズ(仮題)」の製作も予定中とか。

桜の寄贈が最終的に東京市長の尾崎行雄と高峰譲吉の貢献大として後年伝えられているが、実際このプロジェクトを起草したのは当時の駐米日本大使高平小五郎と時の外務大臣小村寿太郎の連携で有ったことを忘れてはならない。2人は日露戦争の終戦処理会場となったポーツマス会議の日本政府代表苦労人コンビだ。日露戦争を扱った1980年公開の日本映画「203高地」の主題歌さだ・まさしが歌う「防人の詩」が何故か満開の桜と隣の奥でダブルののだが、桜は日本人の心を写し出しているからだろうか。

*なお、「Sakura Sakura」は、3月及び4月、ANAワシントンー成田便の機内で上映されるとのこと。



ワシントン・レーガン空港のおみやげ売場:桜の季節になると桜まつり関連グッズが登場、ワシントンへの桜寄贈の精神である日米の「友情」の文字も



久々に尋ねた東宝桜祭り(まんが祭りではありません)の出し物:なつかしのウルトラマンはじめ皆元気でした

2)「Cherry Blossoms」 チェブ子

日本の桜と舞踏をモチーフにしたドイツ映画です。「外国人が見た日本」を、楽しむにはぴったりの映画ではないでしょうか。ストーリーは少し仕掛けがあるため秘密にしておきますが、主人公のドイツ人が東京を訪れるシーンは丁度桜の時期。公園で宴会に興じる人たち、スワンボートに乗って花見をする親子、そして満開の桜の中、想いを込めて踊る少女「Yu」。淡い控えめな桜の色が画面に溢れ、郷愁をそそります。この少女を演じる日本人、入月絢さんは若き舞踏家で、国際的に活躍中とか。可愛らしい容顔ながら、白塗りの化粧をし、薄紅色の着物を着て踊る姿ははっと息を飲むほどの迫力があります。この映画はどちらかと言えば「単館系」であるため、映画館で観る機会はなかなかないでしょう。しかしここはインターネットの時代。NetflixやAmazon Instant Videoでも観られます。今すぐ観たい方は、オンラインでどうぞ。

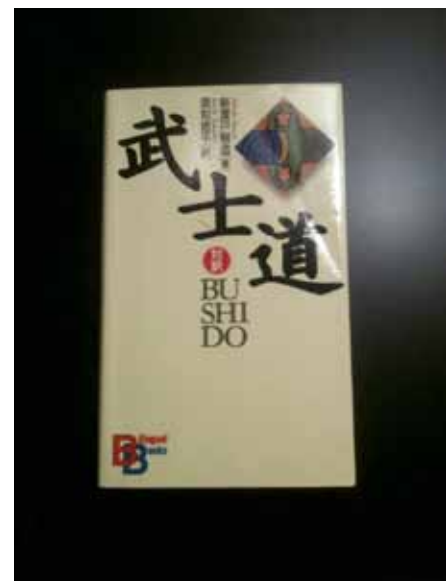
3)「Last Samurai」 ちび〇子

新渡戸稲造はその著『武士道』で、欧米人が好むバラを例にとり、日本人の愛でる桜の花と対比させて、以下のように語った。

わが桜木は、その美の下に刃も毒も隠しておらず、自然が呼ぶ時にいつでも生を捨てる準備ができています。その色は華美ではなく、その香りは淡く、人をあきさせない。色彩と形状の美しさは外観に限られる。

桜の花は「武士道」の象徴ということだ。武士道をテーマにした映画「ラストサムライ」の中で、桜が登場する場面が二つ。渡辺謙演じる勝元盛次の村が忍者に襲われた翌日、トム・クルーズ演じるオールグレンと勝元が満開の桜が舞う寺の境内で「人も桜もいつか散る…」と武士道について語りあう場面。そして勝元が自害する寸前に、満開の桜が目に映り、「完璧だ…」と言って息絶える場面。

この映画は、日本人や武士道を偏見なく描こうとした点で、その努力を評価したい作品。それまでハリウッド映画に見られる日本(もしくは日本人)描写は、白人の俳優が「ツリ目メイク」をほどこしたり、アジア系の役者が(日本語のつもりで)意味不明の台詞を吐いたり、目も当てられなかったことを考えれば大きな進歩である。勝元盛次役の渡辺謙はゴールデングローブとオスカーの助演男優賞にそれぞれノミネートされた(受賞はならず)。



新渡戸稲造の「武士道」: 桜の花は「武士道」の象徴であると解説

4. 終わりに ~私たちにとっての桜について~

それでは最後に、会員の枝田淳とワシントンの桜との関わりについて紹介してもらおうこととする。ワシントンへの赴任準備もほぼ終わり、残り少ない三重での日々を忙しく送っていた一昨年の6

月のある日、赴任以来付き合いのある地元の骨董屋の店主から転勤祝いを渡したいと呼び出された。そこで彼は、今度転勤されるワシントンの有名な桜は日本から贈られたものであることはご存知でしょうが、誰が贈ったか知っていますか、などと言いながら一本の掛け軸を手渡した。その答えは、東京市長(当時)の尾崎悋堂(行雄)で、これは彼の直筆の掛け軸であると。尾崎氏は三重県に縁がありこの手の掛け軸が捜せばあるという。鑑定書の類いはあるのかと尋ねるとそんなものはないが、私の目利きに間違いはないという店主の保証付きの一品だとか。そうか、尾崎先生が日本が世界に誇る花“桜”をアメリカに見事に咲かせたように、私も世界に誇る“新幹線”を走らせるために行くのだから、これは縁起が良いものであるとありがたく頂き、そして、こちらに着任すると早速玄関に飾ることとした。いまだ私の桜は咲かないが、毎朝この掛け軸に見送られて、出勤している。桜寄贈100周年の機会に、この時期ワシントンに彩る美しい桜の生い立ちを振り返り、夢を決して諦めなかった関係者の姿勢こそがその実現に不可欠であったことが知り、私も気持ちを新たにがんばっているところである。ワシントンでご活躍の皆さんも、それぞれの桜を立派に咲かせることができるように、先人の姿勢に学びがんばって行きましよう。



玄関に飾ってある尾崎悋堂筆の掛け軸: 伊勢の骨董屋の親父からのプレゼント、はたして何と書いてあるのか?

5. 来月号の予告

ということで、今回の特別企画を無事終えて、次回の連載は通常のパターンであるキーワードによるリレー形式に戻る。今回のテーマであるワシントンの桜のお返しに1915年にアメリカから日本に送られた花があるのだが、何の花かご存知か? それはDogwood(ハナミズキ)である。よって、これにちなんで次回のテーマをdogwoodsとする。

以上

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第8回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

田中 B作

1. はじめに

「ワシントンで映画を語る会」なる当地の映画好きのメンバーが毎月独自の鋭い視点で映画を語るリレー連載の第8回目。ここ最近では映画を見る機会もめっきり減り、映画とは疎遠になりつつあるという点において、筆者は明らかにこのコーナーに執筆するのに最も相応しくない人間かもしれない。しかし、ここはこのコーナーを担当される方々との「大人の付き合い」を優先し一念発起して筆を執ることにした、というのが執筆依頼を引き受けた本当の理由であるが、ワシントンDC日本商工会会報の貴重な紙面を頂戴している以上は、映画に対して真摯に向き合い、筆者独自の視点から調査・分析した内容を紹介することとしたい。

2. キーワードリレー

さて、今号のキーワードは前月号執筆者が選定した“Dogwood”。因みにこのDogwood(ハナミズキ)はノースカロライナ州の州花であり、映画との関連で言えば、同州はハリウッドのあるカリフォルニア州以外では最も多く映画制作を行っている州の1つとのこと。映画撮影所はシェルビー、ローリー・ダーラム、シャーロット、アシュビルやウィルミントンなどの都市にあり、同州内で撮影された映画には『地獄のデビルトラック(Maximum Overdrive)』(1986年)、Cape Fear(1991年)、The Crow(1994年)、『愛しのローズマリー(Shallow Hal)』(2001年)、Cabin Fever(2002年)などがあるという。

また、さすがに“Dogwood”が州花だけあって、同州には小型のチャーター機のみを取り扱う“Dogwood Farm Airport”という名の小さな飛行場が存在する。米国内外の飛行場、空港をこよなく愛し、日本では成田空港を仕事の拠点とする筆者としては是非とも一度足を運んでみたい飛行場であるが、今回はワシントン所縁の映画という観点から、首都ワシントン空港と映画との関係を探ってみることにした。

3. ワシントン空港と映画

首都ワシントン空港が撮影の舞台となる映画は数多くある。D.C. Cab(1983年)、Die Hard 2: Die Harder(1990年)、“Airport” Series(“Airport 1975”、“Airport '77”、“The Concorde ... Airport '79”)、The Package(1989年)、In The Line of Fire(1993年)、Forces of Nature(1999年)、Body of Lies(2008年)など。しかし、これらの映画の多くに見られる意外な共通点もある。

それは実際に首都ワシントン空港で撮影されていないという点である。

日本でも馴染みのアクション映画“Die Hard 2: Die Harder”では、テロリストによって空港の管制塔が占拠され、管制通信システムが乗っ取られるシーンが描かれている。この映画の主な舞台は首都ワシントン・ダレス空港とされているが、実際の撮影はロサンゼルス国際空港やデンバー(コロラド州)のStapleton International Airport(現在は閉鎖)で行われたのが実態である。

また、“The Package”では、1980年代後半に米ソの冷戦が終焉に向かう中、ベルリンからワシ

トンへ護送して来た囚人に空港で逃げられたGene Hackman演じる軍曹が、その囚人の足取りを追う内に国家的陰謀に巻き込まれていくストーリーが描かれている。この映画も首都ワシントンが舞台とされ、ワシントン空港のシーンが出てくるが、実際の撮影はシカゴ・オヘア空港で行われている。

因みにストーリー設定と実際の撮影場所が異なるケースは日本でも散見される。映画とは多少ジャンルが異なるが、木村拓哉主演の邦ドラマ「GOOD LUCK」では某航空会社の協力の下、木村演じる国際線旅客機副操縦士と彼を取り巻くキャビンアテンダント、航空整備士との人間模様が描かれているが、ドラマで取り扱われている運航路線は主に国際線であるものの、空港施設内の撮影は成田空港ではなく、その殆どが羽田空港で行われたのが実態である。(但しこのドラマの撮影後、2010年10月から同航空会社においても定期国際線を運航している。)やはり、成田は都心からのアクセスが不便なため、撮影クルーから敬遠されるのか？その主な理由は明らかではないが、ストーリー設定上は国際線で、本来は成田空港で撮影されるべきものも羽田空港の施設が利用されているケースが比較的多いというのが筆者の率直な印象である。

逆に映画のストーリー設定上はワシントンDC以外の空港であるにも関わらず、何故かワシントン空港で撮影されたケースもある。中東で対テロ殲滅作戦を展開するラッセル・クロウ演じる米CIA中東局の主任ホフマンとレオナルド・ディカプリオ演じる現地工作人員フェリスの奮闘ぶりを描いた“Body of Lies”では、フェリスがホフマンに対してドバイ空港にいることを電話で告げるシーンがあるが、この撮影場所は誰が見てもドバイ空港ではなくワシントン・ダレス空港のターミナルである。ドバイで撮り忘れたのか、それともドバイでは思い描いていたような満足のいくシーンが撮れなかったのか、真相の程は定かではないが、いずれのケースも見れば明らかに分かるミスマッチである。

筆者が調査した範囲では、ワシントンDCを舞台とした映画は比較的ダレス空港で撮影したものが多い。その辺の空港の映画撮影に関する事情について、レーガン・ナショナル空港及びダレス空港を管理するワシントン空港公団(Metropolitan Washington Airports Authority)のレーガン・ナショナル空港エンジニアリング・メンテナンス部門マネージャーのリチャード・ゴリノスキー氏に話を伺った。

「ナショナル空港であれ、ダレス空港であれ、映画の撮影料は通常1日当たり1,000ドル程度掛かる。公衆エリアは自由に撮影して構わないが、9.11テロ以降、保安検査場での撮影は禁じられている。また、保安検査後のクリーンエリアにおける撮影は必ず空港担当者の立合いが必要である。」とのことである。

つまり、ナショナル空港とダレス空港の間で撮影規制の違いは殆どないということである。個人的にはアーチ状構造を好むフィンランド出身の建築家エーロ・サーリネンがデザインしたと言われるダレス空港のメインターミナルの吊り屋根構造の得も言われぬ美しさがたまらなく好きだが、映画の製作会社も国際線が多く就航し、メインターミナルのデザイン性に特徴のあるダレス空港を撮影場所としてより好む傾向にあるということが窺える。

4. ワシントン空港と桜

多少、当コーナーの本題から逸れるかもしれないが、折角の機会なので『空港』との関連で幾つか書き留めておきたい。今年の日米桜寄贈100周年に因んでワシントンDCでは様々なイベントが開催されているが、去る3月23日に成田国際空港を管理する成田国際空港株式会社(NAA)が

ワシントン空港公団(MWAA)に対し桜の苗木100本を寄贈し、その植樹式が同日レーガン・ナショナル空港(ターミナルA付近)で行われた。筆者もNAA側の一員として参加したが(【写真1】一番左)、これを機に今後も益々日米首都空港間同士の関係強化がなされれば幸いである。また、この他にナショナル空港においては全米桜祭りに合わせて駐車場ビルが(【写真2】)、ダレス空港においてはメインターミナル部分が(【写真3】)、夜間はピンク色にライトアップされるとのことである。もしも夜間に空港に足を運ばれた際にはこうしたライトアップを気にして見ていただくのも楽しいかもしれない。



【写真1】提供:NAA

5. 次月号キーワードについて

さて、桜も満開を過ぎ、いよいよ筆者の好きなメジャーリーグ(MLB)の開幕とともにボールパークに足を運ぶ季節がやってきた。ということで次なるキーワードは「ベースボール」とし、次月号の執筆者へバトンタッチしたい。



【写真2】提供:MWAA

6. 終わりに

今号は、映画音痴な筆者が前月号から引き継いだキーワード“Dogwood”を無理やり『空港』に結び付け、首都ワシントン空港と映画というテーマ設定で綴ってみたが、日頃から利用するワシントン空港で我々の好きな映画が多く撮影されれば、そうした映画に対する親しみもより自然と湧くであろうし、映画に対する興味の持ち方も変わってくるのではないだろうか。最後に、筆者に当コーナーの紙面を割いてくださったワシントンDC日本商工会関係者の方々に改めて感謝申し上げる次第である。



【写真3】提供:MWAA

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第9回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

うなぎの寝床

ワシントンに来て間もない私にリレー連載の依頼が来たのは、ここワシントンの映画好きの数も多寡が知れているせいだろうか？

などという、直ぐに「だったら私にも書かせてよ」という声が聞こえてきそうなのが、ワシントンの怖いところ。できる女性・男性がひしめくこの土地で、何とか命脈を保つには、細々とでもワシントン商工会の会報に寄稿し続けるしかない、迂闊にも簡単に引き受けてしまったのが運のつきというところでしょうか。

映画好きというのはおこがましいのですが、タイトルどおり気ままに今回のキーワード「ベースボール」にちなんだ映画の話をして行きましょう。

野球は「ベースボール」ではないという人も居ますが、ここでは野球まで含めることにします。

一番最近見た野球映画は「ROOKIES-卒業-」(2009)。他にも色々あるだろうという声も聞こえてきそうですが、日本での興行収入は封切り後4週連続1位を取っていて興行的にはこの年の成功した映画の一つと言えます。漫画のような現実感のなさに今一没入できなかったのですが、一緒に行った息子達は感動まくっていたので、きっと良い映画なのでしょう、、、もともと、少年ジャンプに2003年まで連載されていた漫画が原作ですので、私がそのように感じたのも宜(むべ)なるかなです。(ちなみに、私は漫画も好きですので、馬鹿にしているわけではありません。念のため)



イラスト：Yoshikazu Egawa

原作が漫画で実写の映画になったものは、他にもあります。

「野球狂の歌」(1977)は、日活ロマンポルノ全盛期を支えた加藤彰監督が、木之内みどり主演でアニメを実写化した映画でした。細身の木之内みどりがアニメの水原勇気の雰囲気を出していました。

「ドカベン」(1977)も、藤純子の「緋牡丹博徒」シリーズや菅原文太の「トラック野郎」シリーズで有名な鈴木則文が監督をした実写の映画でした。

どちらも原作は水島新司。当時、野球漫画の代名詞のような存在で、ドカベンのような長編漫画(全48巻)は、高校の期末試験が終わると本屋で何時間も立ち読みしたものです。

阿久悠の自伝的小説を原作とし、篠田正浩監督による「瀬戸内少年野球団」(1984)は、主演の夏目雅子の遺作となり、渡辺謙のデビュー作ともなりました。終戦直後の淡路島における野球少年たちの日々を描いた映画で、自らも野球少年だった郷ひろみの傷痕軍人の役どころも良かったと思います。それにしても、夏目雅子さんが亡くなったのは惜しいな一。

ベースボールに目を向けると、色々な映画がありますが、「フィールド・オブ・ドリームス」(1989)が、一番好きな映画です。禁酒法が始まった1919年シカゴ・ホワイトソックスの8人の選手が八百長に参与してシンシナティ・レッズ相手のワールドシリーズにわざと負けたとされるブラックソックス事件に関係した映画です。原作は、W.P.キンセラの「シューレス・ジョー」。「シューレス・ジョー」というのは、8人の選手の中で、スパイクが足に合わず裸足でプレーしたところから付いたジョー・ジャクソンの愛称。ケヴィン・コスナー扮する一介の農夫が、“If you build it, he will come”という声を聞いてトウモロコシ畑を切り開いて野球場を作ると、、、

アメリカでは、よほどブラックソックス事件が衝撃的だったのか、そのものずばりの「エイトメン・アウト」(1988)などと言う映画も作られています。そもそも、今の大リーガーの年棒からは考えられないような低賃金で野球をしていたホワイトソックスの選手たちがクリーニング代も球団が出さなくなり薄汚れたユニフォームを着ることになったため、八百長事件が起きる前から「ブラックソックス」という渾名が付いていました。事件は起きるべくして起きたとも言えそうです。

この事件の裁判の後、ある少年がジョー・ジャクソンへ向かって“Say it ain't so, Joe!”「嘘だと言ってよ、ジョー」と叫んだとも言われていて、“Say it ain't”「嘘だと言ってよ」の部分だけはメジャーリーグにスキャンダルが持ち上がる度に新聞の見出しを飾っています。

また、ホワイトソックスは、この事件以降、1959年までアメリカンリーグのチャンピオンになれず、ワールドシリーズ・チャンピオンに至っては2005年まで遠ざかっていたことから「ブラックソックスの呪い」と囁かれていました。

日本では、1969年-1971年に発生した「黒い霧事件」が有名ですが、それを直接取り上げた映画というのは無いようです。

ブラックソックス事件が起きたアメリカの禁酒法時代(1919-1933)というのは、これまた映画によく取り上げられています。アンタッチャブル(1987)、お熱いのがお好き(1959)、ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ(1984)、暗黒街の顔役(1932)等々。変に抑制されると、良くないとは知りつつ裏社会の世話にならざるを得ず、そうすると映画になりそうな話題が色々出てくるということなのでしょう。チョイ悪に何となく惹かれるのは世の常なので。

「メジャーリーグ」(1989)と続編の「メジャーリーグ2」(1994)、「メジャーリーグ3」(1998)では、メジャーリーグの弱小チームが舞台です。実在するクリーブランド・インディアンズは、1954年のリーグ優勝を最後に長期低迷を続け、1995年のリーグ優勝まで優勝の文字からは見放されていました。映画では、年間の観客動員が80万人を下回れば本拠地の移転が可能になることを利用してフロリダへの移転を目論むオーナーが、ろくでもない選手たちを集めて弱小チームを継続する意図を持っていることを知った選手たちが発奮するというストーリー。弱小チームが、あることをきっかけに快進撃を続けるという筋書きはありそうなパターンで、リトルリーグ版が、「がんばれベアーズ」(1976)。ここでのテータム・オニールもかわいかったけど、やっぱり衝撃的なのはお父さんのライアン・オニールと共演したペーパームーン(1973)。まだ、9歳でありながら、女を感じさせる演技でアカデミー助演女優賞を受賞したのは立派。がんばれベアーズシリーズの後には、泣かず飛ばずだったのか、セックス・アンド・ザ・シティに出演している程度。名子役は名優になれないというのは、ここでも当てはまるようで。ヒロインやコカインもやっていて、ホイットニー・ヒューストンのような運命にならないければ良いのですが。

「2番目のキッス」(原題「Fever Pitch」(2005))は、ボストン・レッドソックス・ファンの熱狂振りを見せ付けたラブコメディ。レッドソックス・ファンというのは、実際、熱狂的な人が多く、球場の座席も殆どがシーズンチケットで埋まっています。ここ何年もシーズンが始まる時にはレッドソックスがホームの試合は満員御礼の状態だそうです。そのシーズンチケットの購入権利は相続できるので、親から子へと途切れることなく毎年購入されて行きます。さらに、シーズンチケット購入権を待つ人も多く、球団が滅多にシーズンチケット購入権を売りに出すことはないのですが、もし売りに出された場合には待機リストの上の人から購入権を得ることができます。待機リストの順番は登録順となりますので、それを相続したいと言ってくる人もいます。

レッドソックスの本拠地フェンウェイ・パークは、現在、アメリカ最古(ということは世界最古)のプロ野球場として知られています。そのフェンウェイ・パークが100周年を迎え、ボストンは大いに盛り上がっているようです。もっとも、「ブラックソックスの呪い」ならぬ、1920年のベブ・ルース(愛称:バンビーノ)の金銭トレードに端を発した「バンビーノの呪い」を破って2004年に漸くワールドチャンピオンにチームを導いた監督として名高いフランコーナ前監督は、最後は追われたレッドソックスに遺恨があるのか、語ることは何も無いと言っているようですが。



現在のフェンウェイパーク

出典:Wikipedia リンクは[こちら](#)

今年は、日本でもおなじみのボビー・バレンタイン監督がチームを率いていますし、JALがB-787で成田ーボストン間の直行便を就航しました。フェンウェイ・パークにも多くの日本人が押し寄せ、にわかレッドソックス・ファンとしてチームを盛り上げるのかもしれませんが。



1914年当時の球場正面

出典:Wikipedia リンクは[こちら](#)

このあたりで筆を置かないと、ワシントン・ナショナルズのファンから刺されるかもしれませんので、次の方にバトンタッチしたいと思います。

おっと、大事なものを忘れていました。日本では、5月は、ゴールデンウィークで多くの人々が遠出をする月。一斉に遠出をするとつき物なのが「渋滞」。ということで、今回のキーワードは「渋滞」とします。交通渋滞に限らず、あらゆる渋滞を取り上げていたきたい。

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第10回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

藤井 陳

今年のゴールデンウィーク、読者の皆様はどんな連休を過ごされましたか。ワシントンにいてもGWは一大行事。普段は東京を離れられない会社のお偉方や、たまの連休にワシントンを選んでくれた奇抜な友人たちの来訪ラッシュという方も多かったのではないのでしょうか。私も、前半は出張者のおもてなしに精を出し、後半は友人にくっついて、ニューヨークはトライベッカの映画祭に行ってきました。

実は、本稿の執筆を引き受けたまさにその日に映画祭に向かうことになったのですが、その奇遇にほくそ笑みつつ、深夜に車でワシントンを立ったため、今月のテーマである「渋滞」とは無縁の旅路。はてさて、本稿の先行きはどうなりますやら。

ワシントンからニューヨークへは、一路I-95を北上します。ボルチモアを抜け、気付かぬうちにデラウェアも過ぎ、眠くなるほど真っ直ぐなニュージャージー・ターンパイクをやり過ごした頃、目の前には一気にハドソン川が開けてきます。あさぼらけ、だんだんと夜が明けて行く中、長い退屈な景色のあとに、朝焼けの摩天楼がハドソン川の向こうに広がる様子は、飛行機でケネディーの空港に着いて、ブルックリンやクイーンズからの橋を越えて颯爽とマンハッタンに渡るのとは、また別の趣があります。

言ってみれば、初めて地方から東京に出てきたときの、あの気持ち。映画「コヨーテ・アグリー」で、ミュージシャンを目指す主人公のヴィオレットが、ニュージャージーの片田舎から、オンボロのアメ車に乗ってマンハッタンに向かうシーンを覚えておられるでしょうか。有料道路の料金所で、ここで働く父親が緑と赤の信号灯をド派手に明滅させながら、彼女を精一杯のエールで送り出すシーン。あれが、まさにここ、ニュージャージー・ターンパイクの料金所でした。



ちなみに、映画は、イーストビレッジのバーで働くヴィオレットが、カウンターの上で歌って踊るパフォーマンスにより一躍人気を得て、と続くのですが、実はこれ、原作者エリザベス・ギルバートの実体験に基づく作品でもあります¹。そして、ギルバートと言えば、その後も、自身の離婚を機に、そこから自分を立て直す過程を本にするという企画を出版社に持ち込み、見事、執筆の着手金を得て世界一周の旅に出ます。そして、イタリアで食文化に目覚め、インドでヨガを修め、最後はバリ島で新しい恋人に出会う、というこれまた自伝的な本“Eat, Pray, Love”²を書き上げます。一昨年には、ジュリア・ロバーツの主演で映画化もされていますので

1 “The Muse of the Coyote Ugly Saloon” GQ Magazine (March 1997).

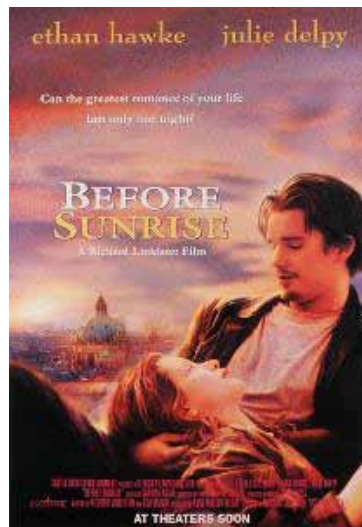
2 “Eat, Pray, Love: One Woman’s Search for Everything Across Italy, India and Indonesia” Viking (2006).

ご覧になった方も多いかもしれません。世界を巡り、新しい恋を見つけ、二度も自作の映画化を果たすとは。これぞ夢の印税生活といったところでしょうか³。

さて、朝一番にトライベッカでチケットを購入した後は、いよいよマンハッタン各所の映画館巡りを始めます。タクシーに乗り込み、これからマディソン街に差し掛かろうとしたあたりで、ついに渋滞発生。まわりは一面のイエローキャブの群れ。そう、これぞ、リュック・ベッソンのカーアクション、「タクシー」の世界です。現実には、私は刑事でもなく、タクシーの運転手との友情も芽生えず、派手なカーアクションもありませんが、気持ちだけは次の映画に向けて加速して行きます。



というのも、今年のトライベッカ映画祭で私が特に楽しみにしていた、「2 Days in New York」(ポスター画像左下⁴)という作品は、「タクシー」と同じくフランスからニューヨークに舞台を移したいわばリメイクものだからです。前作の「2 Days in Paris」と同様、本作でも、ジュリー・デルピーが、監督、脚本、主演の全てをこなし、アメリカ男とフランス女のカップルが起こす悲喜こもごもを描きます。このテーマは、さらに遡れば、デルピーがイーサン・ホークと共演した、「Before Sunrise」(ポスター画像右下⁵)(1995年、舞台はウィーン)、「Before Sunset」(2004年、舞台はパリ)のシリーズにも連なります。どの映画でも、デルピーが描く、そして演じるのは、カップルが行き違うもどかしさ。そして、主人公たちは、お互いをからかったり、説き伏せたり、時には罵ってまでしながら、饒舌にしゃべり続けます。



3 なお、更にご関心のある方は、ギルバートの処女作である「巡礼者たち」(新潮クレスト・ブックス、1999年)という短編集もぜひ。平凡なアメリカ人のありふれた生活を描きながら、その人生の一瞬のクライマックスをさらっと切り取った短編の数々。これがアメリカってことだぜ、と勝手に膝を打ちながら、私は、こんな小説も映画化してくれないかなあと期待しています。配役は、イッセー尾形とか小林聡美にお願いできたら更に楽しそうですね。初出は、「Pilgrims」 Houghton Mifflin (1997)。1997年のパリス・レビュー新人賞も取っています。

4 Tribeca Film Festival事務局より、非営利目的での本件ポスター写真の掲載許可。

5 Wikipediaより転載 (http://en.wikipedia.org/wiki/Before_Sunrise)。

「渋滞は交通渋滞に限らない」とは、先月号の『うなぎの寝床』さんの至言ですが、渋滞して動きの取れなくなった人生に突破口を開こうと、デルピーは、どの作品でも、疾走するタクシーのスピード感でしゃべり続けます。今回の“2 Days in New York”ももちろん例外ではなく、オバマを偏愛する黒人男性、恋が全てのフランス女性、などなど、米仏、男女それぞれのステレオタイプで会話を挑発し、そして、そんな紋切り型のクリーシェもあつという間に「脱構築」してみせるあたり、痛快な話術とともに、最後はじんわりと心の琴線に触れてくれる楽しい映画でした。

いよいよ連休も最終日、映画祭のフィナーレを見届けた後は、夕方からブルックリンに向かいます。新しく出来たセレクトショップやギャラリーを冷やかしながら、アトランティック・アベニューをそぞろ歩けば、道は、ブルックリン・ハイツに入ったところで、クリントン・ストリートと交差します。ここは、映画「スモーク」の中で、ハーヴェイ・カイトル演じる風変わりなタバコ屋の主人が、毎日、同じ時間、同じアングルから10年以上に渡って写真を撮り続けた、という場所です。



「僕は細部にまで細心の注意を払い、天気の変り変わりについてメモを取ったり、季節につれて変化する日光の角度に注目したりした。やがて僕は、交通の流れの微妙な違いを見分け、その日のリズム—平日の朝の喧騒、週末の落ち着き具合、土曜日と日曜日の違い—を予想出来るようになった⁶」

というのは、この写真を見せられた主人公「ポール」の台詞ですが、いざその場所に立って、車や人の往来を眺め、陰って来た日の光の下で映画への思いを馳せていると、単純な私には、自分にもブルックリンが、そして渋滞の成り立ちが、見えてきたような気がしてきます。ちなみに、この映画「スモーク」の原作は、作家の「ポール」・オースターが、自らと同じ名前の作家「ポール」を主人公に配した「オーギー・レンのクリスマス・ストーリー」で、1990年のクリスマスの日、ニューヨークタイムズ紙に寄稿された掌編です⁷。

6 ここに引用したのは、『スモーク&ブルー・イン・ザ・フェイス』（新潮文庫、1995年）所収の柴田元幸訳ですが、他に、『翻訳夜話』（文春新書、2000年）は、柴田元幸と村上春樹の二人それぞれの和訳を掲載して、二人の翻訳に対する考え方が対談形式で綴られています。村上やオースターのファンならずともぜひ一読を。

7 “Auggie Wren’s Christmas Story” New York Times (25 December 1990).

帰り道、ブルックリンからマンハッタンに戻る途中、タクシーはまたも渋滞に巻き込まれ、友人との夕食に遅れて合流します。渋滞を言い訳にして、「だからこの街は嫌なんだ」とうそぶいた後、胸の奥にちくりと痛みが残ったのは、少しずつ、この街が自分の町になったということなのか。

そんなセンチメンタルな気持ちはさておいて、次回のテーマは、渋滞とは無縁の「ロード・トリップ」なんていかがでしょう。僕の前に道はない、僕の後ろに道は出来る、ああ、自然よ、父よ、僕を独り立ちさせた広大な父よ。アメリカのハートランドに向かう旅。ほら、あの頃、そして今も、アメリカは輝いています。(了)



イラスト: Yoshikazu Egawa

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第11回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

オサチ

今回の執筆のお誘いは、とある飲み会で突然受けたものであった。正直、自分が「映画好き」というカテゴリーに入るかという決してそうでないように思い、「いやー最近では子供映画しか見ていないんで」とやや断り気味に返したところ、「じゃあ、子供映画で」という予想外の切り返しをいただき、今回僭越ながら執筆させていただくことになった。

というわけで、多くの方々が興味のない映画について書くことになるやも知れないが、子供や孫に見せる映画の勉強ということでお付き合いいただきたい。

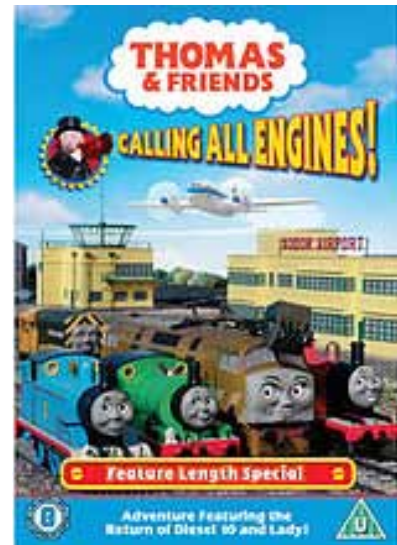
一方で、今回のテーマは「ロード・トリップ」、ということであるが、この原稿自体、締切が迫ってカリフォルニア・セントラルバレーの「ロード・トリップ」中に書いている、というと前号の藤井陳さんが身も蓋もないので、少しこれを踏まえて書かせていただきたい。

1. レイル「ロード・トリップ」

タイトルからして破綻をきたしている感もあるが、私がワシントンD.C.に赴任した頃、我が家の長男が2歳、次男が9ヶ月ということで、最初に彼らが虜になったのは、「機関車トーマス」であった。まだ長男も「トーマス」といえずに、「トゥーン」(その方が英語の発音に近いのかもしれない)と呼んで繰り返し見ていたのは、日本でも森本レオのナレーションで放送している5分弱のテレビシリーズ(ただし英語)であった。¹ ただ、それに飽き足らず、できるだけ彼らを長くテレビの前でおとなしくさせるために我が家が手を延ばしたのが40分足らずの「映画バージョン」であった。ただ、劇場公開されていないので、日本で言うと「Vシネ」に当たるのかもしれない。²

日本で知られているのは、“Hero of the Rails”という、その名もHiroというD51もどきの古い機関車をトーマスたちが救うというもので、日本では何と劇場公開までされたのだが、ストーリーがやや平板であるために、あまり子供達も食いつかなかったように思う。³

それよりもむしろ、子供達はCalling All EngineというDVDに食



「一大土木スペクタクル」
(Wikipediaより転載 (http://en.wikipedia.org/wiki/Calling_All_Engines))

1 余談ですが、人形劇的な旧バージョンの英語版ナレーションの声は、(やや)森本レオに似ている気もしますが、最近のバージョンではCGが大量に使われており、声も、役毎に声優がいるなど、少し風情が変わってしまいました。

2 Vシネが本連載において取り扱うことがOKかということは議論があるかもしれませんが、とりあえず枝田さんや、チェブ子さんの了解を得ております。

3 邦題は、「きかんしゃトーマス 伝説の英雄(ヒロ)」。邦題をつける際の苦心が伺えます。

いついた。ストーリーは、一言で言うと、「一大土木スペクタクル」である。トーマスの住む島、ソドー島に夏休みの子供達を呼ぶために、空港を建設する計画が持ち上がり、その建設資材をトーマスの仲間「機関車たち(Steamies)」が運ぶに際し、「ディーゼル機関車達」と肉弾戦の抗争を繰り広げる。途中、抗争によって工事が進まなくなるが、トーマスが先頭にたって、一緒に働こう(Work together!)と呼びかけ、ついにディーゼル達の中で最も凶悪なDiesel10(電車上部から大きな爪が出ている。日本名はなぜか「ピンチー」)も協力し、空港建設を成し遂げる。"Together we make it happen"と歌われるエンディングでは、飛行機に乗って夏休みの子供達が降り立つところで、大人の私もやや感動すらしたものである。海猿という海上保安庁全面協力の映画があったが、これは国土交通省推奨映画ではないかとすら思えてくる。残念ながら、我が家のDVDは、子供が乱雑に扱って記録面に傷がつき、見られなくなってしまったが。

ここまで読んできて、「英語版」とか勝手なこと言っているけど、トーマスってイギリスが発祥の地ではなかったっけ、と鋭い指摘をされる方もいるかもしれないが、そのとおり、トーマスの原作者であるウィルバート・オードリー牧師は、自らの息子に聞かせていたストーリーを発展させてまとめ、トーマスのストーリーを編み出したとされている。そうすると、ワシントン、あるいはアメリカと関係があるという本連載のルールに反するではないか、とごもつともなお叱りを受けるところであろうが、実は、ここアメリカしかもワシントンD.C.から一時間ほどのボルティモア(B&O Canal Railroad Museum)でトーマスが引っ張る列車に乗ることができるのである。



金網越しのトーマス(B&O Railway Museum付近で筆者撮影)

その名もDay Out with Thomasというイベントは、4~10月頃の週末に全米各地を周遊する形で行われ、トーマスのミニチュアトレインのほか、トップハムハット卿の着ぐるみなどが登場し、トーマスづくしの一日を過ごせるのであるが、目玉は何と言っても原寸大(?)のトーマスが引っ張る列車に乗車することである。

我々家族は2年前の週末に、ボルティモアにてその列車に乗った。全般的には良かったのだが、いくつか問題点はあった。まず根本的な問題として、トーマスに引っ張られているとは言っても、トーマスに引っ張られている列車に乗ってしまうと肝心のトーマスが見えず、中途半端にビンテージな車内の壁に申し訳程度にイラストが貼ってあるだけの客車で一時を過ごすことになる。

次に、場所柄、お世辞にも風光明媚、治安がいいとは言えないところを走るため、窓の外の景色が裏アメリカのような風景で、それに加えて、我々が乗った際には、列車の両側をポリスの白バイ2台が並走するという西部劇さながらの手厚い措置がとられ、逆にジェロニモならぬボルティモア・ギャングにどこからか襲撃されるのではと不安に陥ったほどであった。したがって、タイミングが会えば、そこからもう少し足を伸ばしてペンシルバニア州のストラスバーグ(アーミッシュで有名なランカスター付近)にトーマスがくる時を狙って乗車することをお勧めする。ここは草原を走り抜けるため、気分のいい乗車になるのではないかと思う。

ただ、ボルティモアであっても、やはり原寸大のトーマスが得体の知れない白い気体を吐きながら入線してくる際は、小さい男の子がいらっしゃるご家庭であれば一見の価値ありと思われる。そのトーマスの前で撮った家族写真は我々家族の当地での思い出の一枚となった。⁴

2. 「ロード・トリップ」で始まる映画

その後、子供たちにトーマス以外に何かいい映画はないかということで、飛びついたのが、スタジオジブリの映画であった。もちろん、アメリカで入手できるのは英語版であり、配給も天下のディズニーが行っている。中でも、お世話になったのが「となりのトトロ」(その名もMy Neighbor Totoro)である。この映画の冒頭は、父、さつき、メイの3人がポンコツ自動車に乗って引っ越しするところから始まる、そう、ロード・トリップから始まるのである。

実は、筆者はトトロを日本語で見たことがない。宮崎アニメを毛嫌いしているわけではなく、ナウシカなど見る映画は見ているはずであるが、トトロだけは、どこかで絵本化されたトトロを立ち読みして、子供向けだと思ったところもあって敬遠していた。それもそのはず、驚くべきは、作中の出来事の平凡さである。ネタバレを恐れずに書けば、あらすじはこんな感じであろう。

「メイとさつきは、母が風邪で入院している間に大学教授の父と3人で古い民家に引っ越し、生活を始めた。そこには、大きな森があって、ススをまきちらす真っ黒黒すけやトトロという大きな怪物(?)がいた。ある日、母が入院する病院から急ぎ連絡がほしいという電報が届き、さつきは父親に電話するなど心配する。メイは、5歳という年齢にも関わらず母の入院する病院に歩いて向かい、途中で道に迷う。さつきはメイを必死に探すが見つからず、トトロの力を借りて猫バスに乗ってメイを見つける。一方母親の風邪はたいしたことなく、そのうち退院した」

上記は表現力が欠如していることをご容赦いただきたいが、いずれにしても、このようなストーリーで予算をかけて映画化、劇場公開しようとすることに真に敬意を払いたい。そして、さらに驚くべきは、このアニメが子供の心をとらえるだけでなく、大人の我々、特に世代的に見てあまりこの映画と同じような自然あふれる生活を体験したことのない我々夫婦が見ても、日本の(おそらく)戦後初期の情景などあまり知らない欧米人が見ても、比類することのない爽やかな感覚を残すところである。⁵ こちらに来て改めて思ったが、どうやら、森や巨木に対する畏敬の念は米国人にも共通するもので、幸か不幸か、トトロに出てくるような森や巨木は、日本の東京付近にいるよりワシントン近郊に住んでいた方が身近なもののように思う。



アメリカの「巨木」ジャイアントセコイア(Y国立公園にて筆者撮影)

⁴ ビデオ等の版元であるHit Entertainmentによる開催。米国東部は春先にトーマスがやってくる人が多いですが、詳細は同社ウェブサイト(<http://events.hitentertainment.com/us/day-out-with-thomas/index.asp>)をご参照のこと。

⁵ Amazon.comのレビュー欄は、7月20日現在で約760レビュー、4.5星。日本人とは思えない人々の多数から賛辞を浴びています。

我が家の息子達はトロロをテープが文字通り「擦り切れる」まで何回も観た。そう、すでに時代の遺物と化しつつあるVHSの、しかも中古を購入して見ていたのだが、ある日テープが巻き込まれて破断し、セロテープで接着する等の措置でしのいでいたのだが、しばらくして本当に見られなくなってしまった。その後、ディズニーから出ている新しいDVDを買ったのだが、少しだけ映画マニア風(?)なことを言わせていただくと、両方で英語台詞の吹き替えが若干異なっていることを発見した。当然、映像のノイズなどがきれいになっていて、後者の方が洗練されているように思うが、個人的にはディズニーの冠のないVHS版の方に軍配をあげたい。特に、英語版独特の工夫だと思われるが、猫バスの行き先表示(当然日本語)が回転するところで、"Next Stop, Shichikoku-Yama Hospital"と電子音的な英語吹き込みが入るところは秀逸であった。

3. 「ロード・トリップ」ならぬロード・レース

こっちにきて当初は、子供が騒ぐのではないかという懸念から、映画はすべて自宅のDVDで見ていたが、2年目くらいから徐々に劇場で子供達と一緒に映画を楽しむことができるようになった。

この春からだけでも、Tin Tin、マダガスカル3、Braveと観てきて、傑作とは言えないかもしれないが、十分楽しめるものであったと思う。一方で、妻と子供はアメリカならではの映画以外の楽しみも見つけているようである。妻の楽しみとは、シネコンが併設しているショッピングモ

ール又はアウトレットでの買い物である。つまり、私と子供達が2時間ほど映画館に缶詰となっている隙に、誰にも邪魔されない買い物にいそしむのである。一方、子供達とはというと、映画の前後に映画館に決まってある小さなゲーセンでレーシングゲーム(主にFast and Furious)にいそしむのである。ただし、現在3歳と5歳の息子たちの足ではアクセルまで届かないため、私が2台のゲーム機のアクセルを両足でベタ踏みするという、一昔前の分娩台のような恥ずかしい姿をさらしつつであるが。

私の任期も末期となり、この号が出る頃には日本に帰国していると思うが、思えば子供達もトーマスから始まってずいぶん成長したものである、ということはこの前、ポトマックミルズの映画館で感じたところである。

というわけで、映画好きのためのこの連載で、個人的な思い出話にこれ以上紙幅を取るのはいかがなものかという指摘をいただきそうであるので、ここまでにしたいと思う。子供向けVシネを登場させたり、ネタバレ等やりたい放題であったが、最後は、次のテーマは、「避難経路」として、次回の大先輩に何とかつなげようと思う。



イラスト: Yoshikazu Egawa

ワシントンの映画好きによるリレー連載：第12回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

かつちん

私は、昔から、映画は話題になったもの、ハリウッドのアクションやミーハー的なものを中心にしか見ていないので、とても映画を語れるようなレベルにはないのである。が、前回の執筆者のオサチさんも入った飲み会で、9月1日は防災の日であり、私の仕事が防災関係ということでとんとん拍子に「防災」をテーマに9月号の執筆を受けることになってしまった。

今回の依頼を受けて「子供の頃」と「映画」で考えてみたとき、「映画見にいかへん?」、「気が乗らんわ」、「ええがー!」・・・という昔言っていた駄洒落しか思い出さなかったのは冷や汗ものである。

閑話休題、とにかく何本かをこの機会に見直そうと、アマゾンUSAでDVDを選び郵送してもらって迫力のない13インチのPC画面で見直した。結論を言うとそれなりの大枚、いえ中枚でした、をはたいた甲斐が確かにあった。映画を見返して感じたのは、「災害を扱う映画は概ね、人間同士の争いが少ない爽やかな映画」ということである。災厄をもたらすのが「自然」であるため、人々は協力して立ち向かわねばならないのであり、ハリウッド製作でありがちな善玉、悪玉グループに2分してドンパチをやって悪玉をこらしめるという場面がないのである。

さて前置きはこれくらいにして、つれづれなるまま勝手な感想を述べて行きたい。

気候変動：気候変動に関するものでは「The Day after Tomorrow」を選んだ。氷漬けになった自由の女神など、アメリカを代表するNYの建物がたくさん出てくる。この映画は2005年に制作され、気候変動によって温暖化ならぬ地球大寒冷化が急速に進み、氷河期が現出するというストーリーである。個人的には寒くなるより暑くなりすぎる話のほうが、登場人物の服装が嬉しい方向に行きそうな・・・失礼しました、これは温暖化で氷床が解けることによって海流が変化し、逆に寒冷化をもたらすという現実には言われている説に基づいている、ことになっている。過去氷河期は何万年の時間間隔で来ているが、それが一週間以内に起こってしまうのだから対処のしようがない。主人公のデニス・クエイドはこの現象を唯一シミュレート出来る天才科学者という設定である。ストーリーの前半は科学的フレーバー満載だが後半は完全に家族愛、隣人愛の物語になった。主人公はNY図書館に避難を余儀なくされた息子の救出のために雪に埋もれた原野に飛び出してゆく。その気持ちはわかるが、世界で唯一シミュレーション出来る学者が持ち場を離れてはいけません！最後まで大統領にアドバイスすべきでしょう、とこれだけは言っておきたい(一体誰に言うのだ)。

しかし、ほとんどの登場人物はサバイバルのため助け合い、ラストに南の大地へ向かって飛び立つ、というストーリーが清涼な後味を残すのである。おっと忘れかけました、オサチさんから頂いたキーワードの「避難経路」はこの場合避難所の「NY図書館」になるでしょう。暖を取るために貴重な本がどんどん燃やされて行くシーンは納得出来るがちょっとアンビバレントな気持ちになる。



イラスト：Yoshikazu Egawa

大地震:地震関係ではタイトルそのまま「The Earthquake」を選んだ。時代はぐっと古くなり、1974年制作である。ロサンジェルス郊外の活断層が滑り、大地震がロスを襲う話。主演は終始タフな男を演じたチャールトン・ヘストン。当時50過ぎであるが冒頭から素晴らしい筋肉を誇らしげに晒しており、さすがタフガイだ。この時代なのでCGはなく、大規模セット、オープンエア(カーチェイスなど)、模型を組み合わせて制作している。今ではCGで簡単に作れてしまうビル群の模型が懐かしい。

ビル群が壊されるシーンは円谷プロ製作のウルトラマンで幼少時から親しんだが、子供にも模型と一目でわかる安っぽさ、怖くない一種の安心感があった。ウルトラマンも動かたびにスーツのよじれが目立ったのである(決してばかにしているのではない。子供向け番組として最高であった)。

しかしハリウッドの模型はさすがで、この時代でも出来が違う。ビルは壊れ方もリアルであり、最近のCGを見慣れてさえいなかったらこれで必要十分である。室内のセットでも柱にメリメリと亀裂が入って行くのが生々しい。最近のCG技術はヴァーチャル都市を構築するだけでなく、あらゆるシーン、登場人物の顔まで自在に操れるが、このような技術を駆使した映画は俳優の演技というものをまったく軽視し、そのうち生身の俳優は必要なくなるのではないかとさえ思われ、私は好きではない。

さてこの映画で途中で被災地区が一種の無法地帯になり、ヴァンダリズムが描かれているのは悲しい。災害に乗じた暴動、破壊行為が起こるかどうかは民度と言えるのではないか。最後のシーンで下水路を伝って逃げる人々、そこに侵入するダムの水。主人公と妻は長年連れ添っているが心が通わない夫婦であった。しかし、最後にマンホールを伝って外に出ようとするとき、自分だけなら助かったのだが水に落ちた妻を助けようとして一緒に流され消えてしまった。このシーンは哀愁がある。避難は成功しなかったのだが、これを見た夫婦に、お互いのことを考えさせる映画でもあったのだと感じたのである。

トルネード:「Twister」という1996年制作の映画を選んだ。トルネードの強力なものをツイスターというらしい。ツイスターという、手と足を指定された場所にくっつけ、体がよじれ相手と変な格好で接触する相手次第で楽しいゲームがあるが、本題とはまったく関係ないのである。「トルネードのせいで通れねえど」という駄洒落も関係ないが言いたかっただけなのである。

さてこの映画の主人公は竜巻を追っかけ、竜巻の中に観測機器を仕込もうとする研究者たちである。命がけで竜巻を追っかけ観測する。このような科学者は本当にいるのだ。私の敬愛する親友O氏がそうである。オハイオ州の大学で竜巻をテーマに博士号を取ったが、竜巻シーズンになると車に寝泊りし、竜巻を見つけると近づいて観測し、巻き込まれそうになると逃げるというような

生活をしていただそうだ。強い竜巻は家を粉々にするだけでなく、車やトラックさえも空中に巻き上げる。かつて彼と同じ組織で仕事をしていたとき、休暇を使って竜巻観測ツアーに行こうと計画したことがあったが、どちらかの出張でだめになったのは今でも悔やまれる。ちなみに北半球の台風はず



典型的なトルネード http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:F5_tornado_Elie_Manitoba_2007.jpg

べて、上から見て反時計回りに回転している(コリオリの力に因ると習った)のだが、竜巻については大部分この法則に従うものの少数だが時計回りに渦を巻くへそ曲がりが出るそうだ。

さて映画に戻ると、主人公が決して美男美女ではなく、いかにも正直そうなフィールド研究者風であるところがよい。この場合の「避難経路」はトウモロコシ畑の中の本道である。いかにもライバルといった黒服で固めた研究者群が登場したり、最後は道なき道を走り、小屋から小屋に移りながら逃げ回るなど、よけいな演出もいくつかあるが、CGで作られた竜巻は迫力満点(CGでしか表現できないので仕方ない)であるし、実際に危険を冒して観測する竜巻研究者を題材にしているのもよいと思った。

惑星衝突: 巨大隕石(というか直径数km以上の小惑星)が約6,500万年前に地球に衝突し、恐竜が死滅する引き金になったという説は有力である。因果で言えば今の人類があるのもこれがあつたからと言えるだろう。一つのイベントで人類が滅亡する現実の可能性があるものは、これしかないのではないか。

さて同じ1998年に小惑星の衝突をテーマにした映画が2本制作されている。一つはブルース・ウィリス主演の「アルマゲドン」であり、もう一つが今回見た「ディープ・インパクト」である。興行的にはアクション色豊かな前者に軍配があがったらしいが、こちらは地味であるが示唆が多いと感じている。まず主演級の米国大統領がアフリカ系アメリカ人に設定されている。1998年にこういう時代が来ると予測していたのか、逆にこんなことはありませんからこの映画はフィクションですよと強調したかったのか。この役を、モーガン・フリーマンがまったく違和感なく、冷静沈着な大統領を演じているのはさすがである。彼以外にこの役が出来るとしたらコーリン・パウエルだけではないか(え、俳優じゃない?)。

さらに示唆があるのは、小惑星が地球に衝突するのを避けるため、核爆弾を積んだ宇宙船の乗組員が惑星に衝突し散るのである。衝突を前に地球の妻や子供と最後の交信をする乗組員たちのシーンは切ない。まさにこの映画のハイライトであるが悲しいことに、惑星の軌道変更は失敗し結局地球に衝突してしまうのである。ええ、正義の味方を無駄死にさせちゃうの?と、ここのプロットはハリウッドらしくないが、最後につながる大事な意味を持っていることがわかる。さらに、衝突に備えコンピューターで国民から地下の避難シェルターに入れる人を選別するリアリティが描かれる。「ノアの箱舟」の再現である。結局惑星は衝突し大津波が起こり、莫大な犠牲が出た。しかし最後のフリーマン扮する大統領の演説は心に残るのである“,,,cities fall, but they are rebuilt, heroes die, but they are remembered,,, so now, let us begin.”

その他:「日本沈没(昭和版)」が再度見たかったのだがアマゾンUSAでは買えなかった。勢いがついたので一時帰国時に入手し、是非見返してみたい。実際には日本列島の下にプレートが沈み込み、押される側に力が働いているので何年かかっても沈没する方向にはならないのだが。今とても残念な関係になっている隣国のほうに年1センチ程度ずつ近づいているようで、いずれ本州と朝〇半島は陸続きになると言われている。それまでに両国関係が修復することを願いたい、あと数千万年あるのだから! さてこの映画の最後のテーマ曲を五木ひろしが歌っていて、当時中学生であった私は、「さようならと泣かないで、今は微笑みを…」で始まる曲にいたく感激し、五木ひろしひいては演歌が大好きになってしまった。

さて「洪水」を扱わずに「その他」まで来たことにお気づきと思われるが、洪水や台風は私の本業であり、いろんなリアルな例を知っているので、生々しくて映画もあまり見たくないのである。同様

にいま津波の映画を見るのは不謹慎な気持ちがぬぐえず、楽しめない。結局、災害を扱った映画はいかにもフィクションとわかるものを楽しむか、ドキュメンタリーに近いものをシリアスに見るかどちらかだと思われる。実際の災害・災厄をモチーフにした映画は非常に重苦しいが、一つだけイタリア映画で「Vayont(ヴァイオント)」という映画があることを紹介したい。これは現実に1963年に起こったものでダム貯水池の地滑りが起こり、ダムを乗り越えた洪水で2千人以上が犠牲になった。今回アマゾンに在庫はあったが再生方式があわないことがわかり購入を断念した。昔、マルチな再生機を持っている同僚のところで見たことを思い出す。平和な村が一瞬のうちに濁流にのまれる様は心が痛かった。名前を知らないが憂いを含んだイタリア女優が印象的であった。

「災害」は犠牲となる人や資産があって初めて生じるものである。何もない砂漠の真ん中でどんな豪雨があっても災害とは言わないのである。この意味で、災害軽減のため人や資産を守る対策は欠かさず続けて行かねばならない。昨年東北の仮設住宅でインタビュー時に聞いた話は、現実には映画のストーリー以上のものであることを痛感させるものであった。

さてそろそろ紙面も尽き、またこれ以上書けそうにないので終わりにしたい。次回のキーワードは、中秋の名月にちなんで「月」とします。



1963年に大災害を起こしたヴァイオントダム
(著者撮影)